

5



日本
国語
大辞典

ささ～しよそ



SHOGAKUKAN

日本國語大辭典

第五卷

編集 日本大辭典刊行會
發行 小學館

日本国語大辞典〔縮刷版〕 第五卷

昭和四十九年 五月一日 日本国語大辞典 第九卷発行◎
昭和四十九年 七月一日 日本国語大辞典 第十卷発行◎
昭和五十五年 六月三十日 同 縮刷版第一版第一刷発行◎

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相賀徹夫

印刷者 小林清

発行所 株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二丁目三十一

電話 製作(〇三)二三〇―五三三三
販売(〇三)二三〇―五七三九

〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

* 造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁
などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

0581-420005-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

ささ【**游**】名 水底にたまったかす。どろ。おり。・東大寺誦文平安初期点「心が内の浄土を我等が見ずして愚人の淤（ササ）の白玉を観（み）ぬが如し」〔補注〕他に用例がなく、あるいは「さざれ」などの下部省略表記形か。

ささ(笹、笹名) ①イネ科のタケ属で小形のものを横に称。一種性で、高さ〇二・六メートル。根茎は地中を横に走る。稈(かん)には細長い中空の円柱形で節がある。葉は先のとがった狭長楕円形で基部は鞘(さや)となつて箨(たけのくさ)を包む。タケに対してふつう稈がのびるまゝで竹の竹の皮が落ちない。実はだんごにして食べる。葉は棕(くろ)まきや鰯(いわし)すし、和菓子を包むのに用いる。東アジア、特に日本には、各地に広く分布し、タマザサ、シマザサ、チナメザサ、ミヤコザサなど種類も多く、しばしば観賞用に庭に植えられる。笹草。古く事記上天の香山の小竹葉を手箠に結びて八小竹を訓(よ)みて佐佐ササと云ふ。古今物名四五四「ささ」つばはばせをば、いさめに時まつにぞ日はいへぬる心ばせをばに見えつつ(紀乳母)乃小竹散々々細々小竹也(名語記六、小竹を反ささとなく如何。答。ささは笹也、小竹也)。(中国で酒を竹葉と呼んだところから、また「さけの酒」を「ささ」を重ねたものという。酒をいう女房詞。虎。明本狂言、比良貞比おりやうが所へは、はうはうからささをさささんたにたるに)日葡辞書の「ササ」。すなわち、サケ、余(あま)酒。女性のことば。浮世草子・武家義理物語二「三御酒宴かとなり、女中もつねよりささ、ささすこして」女中詞(元祿五年)「九ことんささ、酒の事」(随筆 柳屋一得、上今女之言ことば)に酒をささと云、義の難劇うたに、ものいのちくえと云、狸(ね)のしゃやうに竹のはのた酒と云。(3)紋所の名。竹の葉や枝などを笹にたとつたもの。三枚笹、九枚笹、根笹、雪持根笹、笹に雀、上杉笹、鳥居笹、山口笹、台笹、島田笹、山口笹などの種類がある。

(4)能楽や演劇の手段具の一つで、狂女の持つて出る笹。狂い笹。また、宮廷音楽で用いた篠(ささ)の採物(とくもの)。・雑俳・柳多留拾遺・卷一九「気ちかひは絵にかく時は笹をさす」(因国語、京都府和歌山県東牟婁郡新宮町)広島県三原(03)山口県(04)ささも少しはよろしゅうござります 764 蘭語訳(1)ササ種(竹)(細小竹)の下の略。ササ(世)は、ササ(小竹)が一種のタケ(小竹)として定説したものの大言筈。(2)葉の触れ合合竹の義日本釈名名言通和訓筈。

う音か、和句解「幸田露伴伝」云々日本古語大辞典
松岡蘭雄・音幻論「辛田露伴」(3)シカサ(然下)、ま
たはシバンタ(菜下)の反(名)語記。(4)サシノ、小
笹葉の義(日本語源学・林楚臣)。(2)について(1)
人に酒をさする時のことばから(綜合日本民俗語
彙)。②君にササグルの略語(紫門和語類集。大言
ヶ(酒)のサを重ねた語か、古事記と訓栞大言
海。(4)酒の異名「竹葉」と語化した語か「嘉良喜通
筆漫画隨筆・閑意瑣談(和調葉)」。⑤酢々が国語化
したものの日本語源考「与謝野寛」。

(園圃)繪之 今史
平安〇金宗一(園圃)和名色葉名義和玉文明伊賀

明徳天皇・神武天皇・垂仁天皇

ささが根あられ ささがしいことのたとえ。
●雑俳・裏若葉・宵寒師・笹に菑の娘とも。
ささに雀(すずめ) 紋所名の。笹に雀のいる模様
を國家雀にしたもの。●淨瑠璃・源義経昇経・道行
「ささに雀の鎖じるし、やれにしきど兄弟よ」(園
圃)繪之

ささの青(あお) 髪(かさね)の色目の。表は白
で裏は青。壮年の狩衣に多く用い、春を用いる時は比
桐襲やなぎをかざねといひ、冬は松の雪ともいう。
●雁衣鈔「布衣事。」略 篠簜。表白。裏青。三四十
之人着之。●装束抄「篠簜青同柳」(園圃)繪之

ささの庵(いおり) いち 笹の葉で屋根をふいた
庵。草庵。笹の屋。●水久百首秋「よしの山みわた
風のほげしきにささの庵は露もたまらず大進」
●新古今 恋二一〇「逢ふことはかのの里の
ささの庵しに露散る夜の床かな藤原俊成」
●俊成卿女集「具実たさくさのいはり夕煙いとど」
かすかに吹く風かな ●玉葉旅・一八六「かりそ
めと思ふ旅族のささの庵も夜や長からむ露の置き
さふ藤原俊成」

ささの魚(うお) 「ささうお(笹魚)に同じ。●俚言
集覽「ささの魚 飛騨國御世より化する魚のよし」
ささの隈(くま) (地名)ひのくま(檜隈)に接続
語「さ」の付いたさひのくまが、ささのくまと誤読
されて、「笹の隈」と解されたもの」生い茂った笹に
よつてできた物かけ。●古今神あそびの歌一〇
八〇「影をだきむひのくま平中こまとめてしばし
水かへ影をだみにみゆ」●平成三九いつはりざし
さのくまぐまよりしかば檜(ひ)の隈くま川は出
でて見ざりき」●源氏権本むつかしげなるささ
のくまを、駒ひきごとむる程なども、うち早めて
片時にまゐりつきと〇補注「古今集の歌は『万葉
集』一二・三〇九七では左檜隈(さひのくま)檜
(ひ)の隈河に馬をとどめ馬に水かへ吾よそに見む
作者未詳」とある。

ささの子(こ) 篠竹(しのだけ)のたけのこと。小さ
いが柔らかなで美味。篠子(すずのこ)。季・夏

ささの鯛(たい) 笹の先に、吹抜きの鯛をつる

た玩具 笹の先に、吹抜きの鯛をつる

ささの露(つゆ) ①笹の葉におく露。・山家集下「庵さす草の枕に伴ひてささの露にも宿る月かな」②酒または少量の酒をいう。・統後鶏道話二上「時にかゝの年より、酒と聞いては、笹(ササ)の露(ツツ)にこそ酔ひ程の下戸じや」③さ親見出し

ささの戸(と) 笹で作った戸。また、笹の生い茂った門戸。ささと。・王二集「さきかくす野守が庵のささの」とあらはにおける萩の朝露

ささの葉は ①小さい竹類の葉。ささは。・万葉二「一三三小竹之葉(ささは)はみ山もさやにさげど」また、妹思ふ別れ来ぬれば柿木人麻呂。・枕三〇「六日はといらかななるに小舟を見やこそいみじけれ遠きはまことに、ささの葉を作りておち散らしたるにこそ、いとより似たれ」②湯立ゆでた(の巫女)みこが神託を受ける時に持つ熊笹の葉。・雑俳・柳多留二五「笹の葉折たらむみだれ髪」・雑俳・柳多留四二「神の声色笹葉を願へ当て」③酒をいう。和英語林集成再版(Sanshin)ササノハ小竹葉「サケに与えらる」または、日本の強い蒸溜酒サケに与えらる」

④「ささのはが(笹葉具)に同じ。 発音(さ)に同じ」

余(の)註(記) ①(註) ②(註) ③(註) ④(註)

ささの巻(まき) 「ささまき(笹巻)に同じ。・御湯殿上日記文明一九年三月二五日「きたこうちとのよりくまはが廿。ささのまきまいる」

ささの丸(まる) 紋所の名。葉のついた竹を束ねて円形にしたもの。 発音(さ)に同じ

ささの丸屋(まるや) 笹の葉で屋根をふいたそのままな家。笹ぶきの仮家。・隣女集三「ふしわびぬ亂れぬ霜水ささのまのやのよはのむねじろ」

ささの実(み) ①竹の実。自然統(じぜんとう)に。②酒の粕をいう女房詞。・日葡辞書(Sasanomi)ササノミ。すなわち、サケノカス(取酒)をしぼった後に残る残滓。女性語。 同(註) ③(註)

ささの餅(もち) 米の粉だんだんを、笹の葉で粽(ちまき)のように包んだもの。岐阜県の平湯温泉の名物。 発音(さ)に同じ

ささの屋(や) 笹の葉で屋根をふいた家。笹のやどり。笹のいおり。・万代恋四「ささのやにあやめ草をふきそへてひまなく今日は人ぞ恋しき」道長「藤原の命」。統後鶏道藤原・六九三「か枕ゆめも結ばずささのやのふしうと」のよはの風に(藤原を教)。・浮世草子「武家義理物語四二」・とかは御ころまかせにと、先笹(ササ)の屋のせまき住いをお目かけ

ささの宿(やどり) 「ささ(笹)の屋」に同じ。・竹集あさち生ふるをののし原草ふかみささの

ささの雪ゆき ①絹漉豆腐(きぬご)しどうぶ
 の風雅な呼び方。そのなめらかさを、笹の葉に積もった淡雪に見立てたものという。淡雪豆腐あわゆききどうふ。人情本「吾郷春雨」前二回「有合したる酒肴、紅葉豆腐も笹(ササ)の雪(ユキ)」
 ②豆腐料理の一つ。文化・文政二(一八四二)ごろから、江戸根岸新田・東京都台東区根岸の料亭で売り出された。葛籠(くわご)をかけた絹漉豆腐。吉原柳りの客で繁昌し、根岸名物となつて現在に至る。また、その店名となる。人情本「花街寿舞女下」笹(ササ)の雪(ユキ)は当時流行でござります。あまうし上品で、私しなぞア矢張歳前の祇園がよろしうござりますテ。歌舞舞・因幡小僧雨夜漸(さ)田町から吉原へ行くが、いっそ今日は午の日だから笹(ササ)の雪(ユキ)で飯を仕上げ、根岸通りをふらふらと飛鳥山から壬子へ行くが、か・浮雲二・葉亭四連・一六・芝居はマア芝居として、如何で。明後日団子坂へ菊見といふ奴は「略」笹の雪(ユキ)アないかね。正可(まさか)に」
 ③笹に積もった雪がすく落ちるようになり、首や胴がすくにも落ちることを表現して、武士が刀に、
 た名。武家名目抄「刀剣部」笹雪増補家忠日記云「天正二年四月九日略池田が刀入笹の雪と号する名剣也」雪を永井に授く。④紋所の名。笹の上に積もった雪を図案化したもの。雪持笹。〔笑園〕
 ⑤(之) 金(之)
 ささの脇葉(わきば) (笹竹の横に出た末の葉の意) 直系が分かれた系統の人をいう。傍系。支系。狭衣物語「四むしか人の代りには、ささのわきばにて頼頼(よりより)べきやうに、言ひ契りしかひなう」
 ⑥(之) 植物。ささ(眞豆)をいう女房詞。大上(おほのうへ) 御名之事(みことごと) ささげ ささ。女重宝記(女祿五年)一・五・ささげは ささ。女中詞(女祿五年) ささとは、小角豆。
 ⑦(之) 岩手県や仙台で、着物用の襦(まこ)をいう。
 ⑧(之) 手紙のことをいう、盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕
 ⑨(之) 名(之) 植物。あさ(麻)。秋田・大分両県一部に「佐々(ササ)笹」のつち。〔笑園〕
 ⑩(之) 佐々(ササ)笹のつち。〔笑園〕
 ⑪(之) 〔此レ〕形動。氏(し) すこばかりのさま。わすか。小説神髄内道寺上・小説の変遷「舊族次第のさかえて、勢強大になるにたれば、人の心おづから做つて些(ササ)たる事を巨大(きょだい)にひなし」・福翁百話「福沢諭吉」五「然かも其照臨の正確なるは絶対の真にして、些(ササ)たる人間などの瞞着(まんとく)を許さざるものなり。旧唐書陽南復伝「近日事亦漸好、未免些些不公」亦無甚短。〔笑園〕
 ⑫(之)

さーさ『嵯峨』『形動タリ』高く険しいさま。嵯峨。*草枕・夏目漱石「一〇一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して濃き水の折れ曲る角に、嵯々と構へる右側には」〔発音〕せうせう。

してゐる。また、くだくだしく述べた。本朝
文粹六中民部卿輔佐橘直幹「然而蒼蒼之玄遠
答瑣瑣之凄懷未遂」西国立志編中村正直訳「
三」「然れども瑣々たる流俗の説と侮て、これを査察
するもの一人もなかりけり」。一家内の珍聞「国木田
独歩」折角の平和な家庭も、まことに瑣々（ササ）な
原因のために、飛んだ醜体を現はすこととなる。
・詩経小雅節南山瑣瑣姻亜、則無咎仕（桑南
論之更）

ささ(「然」)語(「語」)の重要なもの。①「意を表する。そうする。ささうさよう。『宇津保傳』「いとうつくしげに調じたる唐鞍をとりいだして」これはなににすべき物ぞ」とに見すればささ、これしていとうつくうまづるべからむ。②「具体的に叙述する省略し、内容の存することだけを形式的に指示する。かじか。『婦始下天祿三年』今はかちちをもことになしてむくてなん。ささのとこに目へりてはものせらるる。『婦始下天祿三年又の日かかへりて、ささなんといふ。』源氏下幸ささのこををこそのかしくと中宮かしくと、おはす」ささして(「して」は動詞「す」の連用形に助詞「て」

が付いて、助詞化したものだ。詳しくいうべきところを省略して述べた時に用いる。これ、この事情情を、そうこうして。・蜻蛉(中・天祿二年)ささして、まゐり給ことあなり。・蜻蛉(中・天祿二年)ささしてもものしたりしか、いずなりき。

ささ(調)「多く」を伴って用いる。①風が吹く音などを表わす語。ささつ。名語記六・風のさささ」とよく如何。蠟をいふや。音のさささときゆる上。・源平盛衰記三・遣憲祈雨事、扇をひらげて、颯也。さささとして扇を散らつた。②水などが勢ひよく流れたり、そそぎ散らかつたりするなどを表わす語。ささぎ。・名語記六・水のながるるをとのささ如何。ささらからの反ればささ也。・徒然草第一四・御牛を追ひたれば、あがきの水、前板までささとかかりけるを。」(閑齋僊之図)

ささ(感動)①はやしことば。・古事記中・歌謡(この御酒のみき)は我が御酒なりと略(豊厚(ほ)き春き趣もとは)し奉まづり來し御酒を(残)あき奉さず飲もせ(佐佐ササ)。・古事記中・歌謡(この御酒のみき)の御酒のあやに転來(うた)だのし(佐佐サササ)。(2)人に物事を勧めたり誘つた時に發する語。ささあ。・滑稽本・浮世床・初・中・させいはんすなこそちや。そりや立人ぢやないとのつと、横人ぢや。・歌舞伎・三八・吉三・廊初賀・序幕・ササもう

よい、その貞節な詞を聞く上はおれも安堵ぢや」
補注①について、「万葉集」に地名「ささなみ」「ささら」の小野の「ささ」に、それぞれ「神楽声」「神楽」の字を用いている。また「ささ」は、本来「栄えよ」の意の祝福のこととする説がある。〔國語通〕①イザ(去来)を

重ねた「大言海」。(狹い語が「古事記」に
さへ「細小」語も) (狹い語のさへを重ねた語後
世は) (とも) 主として名詞の上に付けて、「こ
まかい」「小さい」「わずかな」の意を表わす。ささら。
ざされ。書紀・神代下(兼方本訓)「汝か生子」ゆ、
この八十連風やつつきの裔に、汝かまぢ、
狹貨鉤(ササまち)、と言ふまじ訖て

國關(國)形容
詞サシ(狹)の語根を重ねた語「大言海」。細小の義
「古今要覽篇」。(2) ススキ(透々)の義(名言通)。

さざ【名】方言醬油(しょうゆ)の表面に浮かぶ白い鰍(かび)。静岡県榛原郡本川根566 鳥取県702 石見723 隠岐726

さざ【且座】『名』茶事(ちやじ)の一種。七事式の一つ。客三人

と東より半亭主、半東はんとう半亭主の補助役の五人で催す。客三人のうち、正客は花を香け、次客は炭をつぎ、三客は香をたいて、主客と主客を聞く。東は濃茶(こいちや)、半東は薄茶(うすちや)をたてるといった趣向。(笑園會堂^二)

さざ(副)(多く「と」を伴つて用いる) 人々が声をた

てさういふことを表へた。さうかやうな
わ。落筆二、三皆のしりて、さうして出で給ふ
なはち、あこぎ告げに走らせやりたれば、
々の別「いかにいかにと覺し渡る程に御気色あり。
さざとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」。大
鏡六、道長下「これはまた聴聞衆共、さざとわらひて
まかりに長下」

ざざ【**坐作**】『**名**』すわることとなつこと。たちい。身のこなし。起居。↓**坐作進退**。【**発音**倉々切

ざざ【**名**】①因①川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡郡②川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ざざ【**副**】(多く)とを伴つて用いる)①水が勢いよ

く流れたり、雨が激しく降ったりするさまを表わす語。ざあざあ。②風にさわぐ木々の葉など、物のすれあう音を表わす語。(発音) ぜーぜー

さざあみ【世編】(名) 編み物で、鉤針(かぎばり)を用いて、笹の葉のような模様をあらわす編み方。(発音) ぜーぜー

ささあめ〔細雨〕名 わずかな雨 小雨。＊改正増補
 和英語林集成 Sasame ササアメ
 さあめ〔笹〕名 笹の葉に餌を包んだもの。新潟
 県越後の名産。＊坊っちゃん「夏目漱石」一「越後
 の笹館が食いたい」と云った 〔開園會〕の 〔金を切
 さい〕さいふ 〔支〕名 「ささえ(支)」の变化した語。
 ＊歌舞伎・小袖曾我剱色縫(十六夜清心)四立「実は出

家の御身分に、あるまじき事ながら濡た袖故ささひもなく」

ささい【些細・瑣細】《名》(形動) 小さなこと。わずかなこと。たいしたことではないこと。また、そのようになさま。・東海一瀉集「一和儀則堂韻謝珠荆山諸兄

見覺。憶昔好時。種書目録。乃以爲瑣細。○有瑠璃。イイ名も本珠臣蔵十六見れば。家内に取込にも有ふな。彼も本瑠璃。サヤいな内証事。○滑稽本浮世風呂。三上。さるたぐひの些細。サヤいなるうが。ちば、ものうしてここにしるさす。○蘇軾。種松詩。『初移一寸根。瑣細如三插秧。』(笑園會之妙。余之○百詩類書言)

江飛」・自然と人生・徳富蘆花・湘南雜草・立春・續々
づかに砂塵(ササイ)に漣(さざなみ)を捲きて、緩々
砂に融くるのみ」

ささい【**『璉才』『名』**とるにたりない才能・才能のない
こと・無才・色葉字類抄「璉才 ササイ 无才之意也」

●易林本節用集「璉才 ササイ 无才之義」

●**『国語色葉集』**

●**『易林』**

さざい ささる(笹井) 姓氏の一つ。〔開道増之①〕

さざい 【栄螺】《名》①「さざえ・栄螺」の変化した語。
・言継卿記 天文一五年三月二〇日「予又内々へ参、さ
さい数十被下之。」② 日葡辞書(Saia)(サザイ)「参、さ
るの種」也。元和本下学集「栄螺、ササイ」。浮世草
子・風流曲三味線「三二」傳の有野郎弘法大師「顔を

かけてさざいを断ち・咄本・鯛の味噌津・栄螺（サザイ）を五つか人と亭主と五人の算用にて、栄螺（サザイ）を五つか（栄螺ひ）②（さざいどうろの略）「さざえどう（栄螺の掌）」に同じ・雑俳・柳多留「さざい」釜のふた明けく日にさざいにへこぼれ」〔補注〕さざいの子見出し

さざいの項にまとめた。

〔発音〕 樽ご切

〔古辞書〕 字・文明

明応・天正・饒頭・奥本・易林・書言
 さいい〔名〕鳥ミもそさいい〔鶴鶴〕の異名。・色〔葉字
 類抄〕反名「ササイ」。・名語記「八小鳥の名にさいさい
 如何。答、略」なくこのえのときこゆればさいさい
 いはやきの反。さてさいい也。この鳥か春はさへつ
 りてうぐひすといはるる也」・雑俳・村雀「楊弓も小

雀ササイが身には五人張、雑俳、狂俳玉柏、一柏
葉ガサガサ、路次下駄、来てサザイ啼く、
106 (さざ) 下駄 046 国語連環集 和玉、伊原
ざざい ①劉荊「名」①劇毒性のない草の根や木の皮
を細かくきざんでつくった薬剤。煎じたりなどして
服用する。②ざややく(座薬)に同じ。〔発菌論〕

さざいがい【がひ】榮螺貝【名】「さざえ榮螺」①と同じ。・浄瑠璃 国性爺合戦二「我はあはびの片思ひにくやそものさるほうに、くはせたいぞやさしい」【発音】サザイガイ【類】①

さざいから〔栄螺殻〕名 ①ササエの貝殻。・浮世草子・本朝陰絵比事二・三「仏らしき物は見へずして口欠の茶壺又は消皮螺(ササイ)がらより外は何もなかりき」・雑俳・頼とり舟「声かして蛙啼する栄螺から」・雑俳・柳多留一二「さざめがら海へぶちこむさざい」

た坂」(2)「形が似ているところから」にきりかぶし。拳骨(げんこつ)。「浄瑠璃大経師昔語り」上になめるい旦那とたぶさを取てさびながら、二三十くらはせ」(3)「尻が尖とが」つていてすわりが悪いところから」出歩いてばかりいて自分の家に落ちていこう者のたとえ。尻のすわらない者。浄瑠璃大藏經「三つわりの所にばつかみひて、うち尻かすわらぬとて、さびひがらの五郎介と、所で異名かについて有」(発音「サイイガラ」 兼二〇)

ささい(さいさい)「**【支小字】**名。ささいこさえ(支小字一)の変化した語。・浄瑠璃 祇園御九重錦」・「はな立ってささいこさい、盗賊の手引したは」・浄瑠璃 伽羅先代萩「傍に付添ふ倭人原めか、ささひこさい言廻し、剩あまつさへ御前を遠慮」・歌舞伎・傾城金秤目三番目・序幕「わりやあぢな所へ四文と出て」

さいじり【采蝶尻】〔名〕①「ささえじり(采蝶尻)」に同じ。②「ささえじり(采蝶尻)」に同じ。
 ・雄非野の錦大名を渦へ巻込むさい尻〔発音 無音〕
 ささえなえなえ・ななへ【采蝶尾】〔名〕陣形がらせん状で、本陣が奥にひっこんだ形をいう。・雄非伊勢冠

付「文化一〇」憶病軍（いくさ）・本陣さざの備へなり」
 〔発音〕
 さざいたく〔笹板〕〔名〕屋根を葺（ふ）くための杉板。
 ・俳諧おくれ双六冬・鳥の巢を風のさざ板洩るし雨
 ・調子絶）・雑俳・へらざ口へ不角撰「打やうを時雨
 笹板の五寸釘」〔因〕秋田県鹿角郡156 群馬県利根郡

047 山梨県南巨摩郡512 長野県佐久526 鳥取県702 発出
 音①
 ささいたち【笹鼈】(名) 小さい鼈(いたち)。・俳諧
 五元集十頁春「鶯がねぐら笛吹おこせ笹鼈」 発出
 音①
 ささいとう ; ダウ【采螺堂】(名) 「ささえどう」(采螺
 音①)

堂」に同じ。・洒落本 当世繁栄通宝「らんじに蝶
 堂・サヤイトウ」(たかく)・西洋道中膝栗毛 仮名垣魯
 文一〇・下「まはらうかをのぼりゆくに、さざい
 のことく」・改正増補和英語林集成「Sazaido サザイ
 ダウ 螺堂」(英)国サザイダー 倉〇
 さざいなし「形ク」(さざい)は「しざい(仔細)」に

同しか。さしとわづりかぬ。さしつかえかぬ。男
状ない。しさいなし。●愚管抄・五・高倉「九条の右大
臣兼実は右大臣にて法性寺殿の三男、ささいなくて、
天下の事顧問に預りて」・十訓抄・七・俊綱欲笛吹成
方大丸笛事「あらぬ笛を大丸とてうち摧きて本の大

というが未詳。ささえ。ささえおどり。古今打聞中「小々江小島(ササエコリ)」。古今打聞中「かきねつたささえ小島とはやて驚きそへ春のまうけに、赤人。ささえ小島とは驚のおや也。驚も老ぬれば、ささえといふりになる也。ささえこ鳥とつづくへ」。

ささえじょう ささへじょう(「状」)自分の立場が正當であることを主張する文書。また、鎌倉・室町幕府の訴訟手続で、訴人原告の提出した訴状に対して、論人(被告)が弁明のために提出する陳状をいう。ささえじょう。『文明明用集』ササエジヤウ 訴訟之時用。『国語文庫』伊東 明彦 編輯 東京・岩波。

ささえじり 『采蝶尻』①サザエの殻の先のらせん状になった部分。志都の岩屋講下「耳の音を聞く訳は丁此の耳の穴は近く云はば、采蝶じりのやうに成つて」②(サザエの尻が巻いているところから)心のねじけた人のたとえ。ささいじり。『采蝶尻』。

ささえぞなえ ぞな(「采蝶」)「ささいぞなえ(「采蝶」)に同じ。

ささえだて ささへ「支立」(「だて」は接尾語)邪魔をする。妨害すること。歌舞伎・暫(さ)日本古典全書所収「邪魔な顔故、取りおろすを、ささへ立(サテ)なす不届者めが」歌舞伎・大和所本木村四立目「こしゃくな女のささへ立て、邪魔せすと通せ」ささえつき 『采蝶』①漁具の一つ。一畝ぐらいの竹竿の先端に鉄製の三又みづつけ、サザエを突きさして捕える。『采蝶』。

ささえつりこみあし ささへ「支釣込足」柔道の投げ技の一つ。相手の体を釣って前隅にくずしながら、足の裏で相手の出した足の下端を支えて、ねじりように投げる足技。『采蝶』。

ささえどう ざう(「采蝶」)内部の階段が螺旋梯子(らせんばし)に似た構造になっている室。江戸本所五目にあった「ささえ」。



采蝶堂(江戸本所四国會)

ささえとどむ ささへ「支留」支止「他(マ下)」動くとするのをさえてとめる。有楽門(森岡外)車掌は從容として右の脚を差し伸べ、この小き反抗者を支へ留(トド)めて。『采蝶』。

ささえとり 『采蝶取』①海でサザエをとること。また、その人。②「ささえばさみ(「采蝶」)に同じ。『采蝶』。

ささえばさみ 『采蝶』①機にいたるサザエをとる道具の一種。竹竿の先に樫の木を四つ割りにし、先を開いた状態にしてとりつけたもの。竹竿の先を二つ割りにしたものがある。采蝶取り。『采蝶』。

ささえはしら ささへ「支柱」物の落下や倒壊などを防ぐ支えるために立てる柱。つかいばしら。つばり。しちゅう。『采蝶』。

ささえび 『采蝶』①昔、金山などで、坑内に持て入った燈火。一説に、サザエの貝殻に油を入れて火をともしもの。采蝶の。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

的に、または経済的に援助する。支援する。二人比丘尼色懺悔(尾崎紅葉戦場)「自害は得遂げず、恩愛の手に降(ササ)えられ」④相手の勢いをくいとめる。防ぎとめる。『采蝶』。

ささえはしら ささへ「支柱」物の落下や倒壊などを防ぐ支えるために立てる柱。つかいばしら。つばり。しちゅう。『采蝶』。

ささえび 『采蝶』①昔、金山などで、坑内に持て入った燈火。一説に、サザエの貝殻に油を入れて火をともしもの。采蝶の。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

ささえびね 『采蝶』①金ほりなど穴中へ持つく灯。『采蝶』。

会を抜けて帰ると。『采蝶』。

ささき 『笹』①笹竹で結った垣根。・散木奇歌集「藤枝ささき」・浮世草子「西諸国はなし」・五伏見の豊後橋の片陰に笹垣(ササキ)をむすび、へろ世を暮しぬる盲人あり。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

ささき 『笹』①細い筆を何本も束ね、数本の線を一度に描けるように工夫したもの。薄(すすき)や笹などを描くときに用いる。万金産業袋「薄笹を六本、八本など一つにつき合せ、笹書きなど名付けて用ゆ。『采蝶』。

にのいとはけずのみ見ゆるけしきなり。拾遺雜歌
一〇八二たなはたは空に知るらんさきかにのいとは
かく許まつ心を源順。風雅恋四・一三〇八絶
えねばと思ふも悲しさきかにのいとはれながらかの
るとききは藤原爲家。式子内親王集さきかにの
いとはけずのた露のいづまでとの思ふものか
ら。④蜘蛛の「い」(果網の意)というところから
同音を語頭に含む「いかさ」(かななり)といふ
「命」の今にもなく吹く風はかくてあまたになりざ
すらしも。後拾遺恋三・七六九蜘蛛手さへき絶
えにけるさきかにの命を今は折にかくまひ馬内
侍。統古今恋五・三八〇何々にかくとは見え
てさきかにのいかに思へばたゆるなるらんよみ
しらず。〔補注〕書紀十卷八年二月歌謡の我が背
子が来べき宵なり佐饒饒泥能(ササガネ)の蜘蛛の
行なひ今宵着(しる)也。①の「古今集」の原歌
に見られる上代の「さきかねの」(笹の根)の意が
中古以降「さきかに」の形で伝えられたことによ
うになる。〔附〕園田ササガ二 鬱智②

さきかにひめ〔細蟹姫(蜘蛛くも)が糸をかけるこ
とにちなんでいう〕琴座の首星、織女星の異称。
〔季秋〕・俳諧増山の井・七夕 あさかほひ秋。
たきものひめ、さきかに姫。・俳諧句鑑拾遺秋、か
ねて知るさきかに姫や来べき宵素云。・和歌貞竹
集十四の七姫といふはたきもの姫。さきかに
姫提の葉姫略以上織女星の異名也。〔附〕園田ササガ二
ヒメ 鬱智②

さきかね〔名〕「さきかに(細蟹)」の変化した語。
さきかねの根〔根根〕笹の根と。また、笹の生
えている場所。上枕詞「さきかねの補注」。書紀
十卷八年二月歌謡我が背子が来べき宵なり佐饒饒
泥(ササガネ)の蜘蛛くもの行なひ今宵着(しる)し
さきかねの園〔蜘蛛くも)にかかると。天降言「せ
きつぞ水引くらんかさきかねの蜘蛛に渡すこれのの
八橋。〔補注〕書紀十卷八年二月歌謡の我が背子
が来べき宵なり佐饒饒泥能(ササガネ)の蜘蛛の行な
ひ今宵着(しる)也の異伝歌が「古今集」の仮名集の
古注や墨城歌に「我が背子が来べき宵也さきかにの
くものふるまひかねてしるし」とあるところから
「さきかねを、笹蟹と解して蜘蛛の異名と考え、書
紀のさきかねのを枕詞とする説もある。↓笹根根
(さきかね・細蟹)さきに」

さきかまぼこ〔「浦清餅」(名)笹の葉の形に似せてつ
くった蒲餅。仙台地方の名産。】

さきかに〔地方名〕茨城県筑波山周辺から栃木
県にかけての地方で、二月と二月の八日にまつる

ささかき(『名』) 妻宅、隠居、別宅の類をいう、盗人仲間
 の隠語(『隠語輯覧』)
 ささかや(『笹置』『名』) イネ科の一年草。各地の山野
 に生える。高さ二〇―七〇センチ。某の下部は地
 面を横にはい各節から白根をおろす。葉は披針形
 下部は鞘(さや)となって某を包む。秋、茎頂に数
 個に分かれた緑色の花穂をつける。小穂には良芒
 (のぎ)がある。〔開園ササガヤ 倉之助〕
 ささかる(『動』) ①うるさく触れたりして邪魔にな
 る。〔前掲〕目ささかる。長野県下伊那郡044(ささ
 がる。高知県長岡郡大豊044②未処理の事などが気が
 かかりで落ち着いて物ができない。岩手県泉仙北郡133
 ささかた(『名』) 開園魚。①したばかりの古野。あ
 かしがばい(赤古野)。宮城県山田台06②やなぎ
 むしかれい(柳虫蠅。新潟県丹後・兵庫県城崎郡
 住028)
 ささかわさかは(笹川) (ささか) とも ①福島県
 郡山市の地名。江戸時代は奥州街道の須賀川と日出
 山の間にあつた宿駅。②千葉県香取郡東庄町の地
 名。明治末期までの利根川の河床。成田線が通じる。
 〔開園 倉之助〕
 ささかわさかは(笹川) (ささか) とも ① 姓氏の一
 つ。〔開園ササガワ 倉之助〕
 ささかわりん(『名』) 俳人。評論家。本名
 種郎(たねお)。東京出身。東京帝大卒。大学在学中
 中環波会をおこし句作にはげむ。『帝國文学』
 学』の編集に携わつた。明治三〇昭和二十四年(一八
 七〇―一九四九)
 ささがわちぢみ ① ささかは(笹川) 縮『名』 三重県松阪
 地方から産出する綿縮。明治四〇年(一九〇七)、同
 地の笹川縮製綿所で織り始めたところからいう。寝
 巻、子供服、カーテンなどに用いられる。〔開園サ
 サガワチジミ 倉之助〕
 ささき(『名』) ①因園樹木。②さかき(柳)。神奈川県中部
 289 岡山県津山735②ひささき(姫櫛)。岡山県吉田郡
 731 広島県芦田郡府中742
 ささき 佐佐木『名』 ④をいう。人形浄瑠璃社会
 などの隠語。宇多源氏の佐々木氏の定紋が四目結
 (よつめゆい)なのでいう。酒落本・品川楊枝・仕立屋
 のふちやうとなつて、平おこしめ(へきさき)・
 ささ木・滑槽本・浮世床・二上・さいこぼう、もちり
 たくなつたゆめあや路ささきか、かたこせたはいの
 う) ⑤謡曲。佐々木四郎高綱は木曾義仲討伐に出
 陣する際、源頼朝に頼んで秘蔵の名馬生暖いけず
 きをもらふ。駿河の浮島ヶ原で梶原景季との馬
 のことで口論となつたが、やがて仲直りをして、梶原

木。馬磨墨(するすゝみ)ともどもに都へ来る。馬乞佐木。さきき。〔狭狹城・沙沙貴・佐佐貴・佐佐木〕地名。「和抄」にいう、近江国蒲生(かみふ)郡藤簡(ささき)郷上代・大参の子孫狹狹城山君(ささき)のやまの(み)が住み、大参の佐佐木氏となり、字多源氏雅言の成頼が入部して莊官となつた。中世には近江源氏を稱する佐々木氏の本領地であつた。現在の滋賀県守部安土町(八日市)との一部にあたり、沙沙貴社や佐佐木城・観音寺城址などがある。書紀孝和七年二月・北野(南北朝期謂)兄大参(いねの)はひこのみことは、是(これは)阿倍臣(あへ)の(み)膳臣(かして)の(み)阿間臣(あち)のをむく(に)のみやつこ、越国造(こしくに)のみやつこ、狭狹城(ササキ)の山の君(きみ)、筑紫国造(つくし)の(み)やつこ、越国造(こしくに)のみやつこ、賀臣(か)のかのをむ、凡(およそ)七族(ななうぢ)のをむ(祖)を(や)なり。書紀・雄略即位前(寛文版謂)近(近狹狹城ササキ)の山君韓僧(ふく)言(さく)〔園倫之①〕

ささき〔佐々木・佐佐木〕姓氏の一つ。〔園倫倫之①〕

ささき いちぢぞう〔佐々木市藏〕邦家者。常磐津のさきわづ三味線方。○初世。鳥羽屋三右衛門の弟で、初め江戸節の三味線方であつたが、ちの宮路文字太夫の相手となる。延享四年(一七四七)字太夫が常磐津と改称のときに佐々木市藏と改し、常磐津節の確立と興隆に貢献。作曲にもすれ、蜘蛛の糸などの名曲を残す。明和五年(一六八四)没。○二世。本西村徳藏。二世岸杢九の門下。初名岸杢八五郎。のち同市藏と改称した。天明一年(一八四〇)佐々木氏を復活して二世なる。名人とうたわれ、鳥島などの曲も残す。寛政一〇(文久元年二七九八・一八六六)ささきげしゅう〔佐々木月樵〕近代の真宗大派の僧、仏教学者。清沢満之に学び、雑誌「精神衛生」を通して仏教に新風を送りこんだ。大谷大学などをつとめる。明治八・昭和元年(一八七五・一九二六)

ささきこじろう〔佐々木小次郎〕兵法者。鯨流柳(かみりゅう)と号した。越前国一乗谷村浄教(福井市足羽)の太刀小の名人。中条流宗家富田源(ただしげん)の家人といわれる。燕返しに法を考案し、筑前国福岡県小倉で細川忠興にえた。宮本武蔵の試合に敗死。慶長一七年(一一二)没。

ささきだつな〔佐々木定綱〕鎌倉初期の武将。江国守護。近江佐々木氏の祖。母は源為義の女太郎と称した。源頼朝に従い功をさかせる。建二(一一九二)延暦寺の僧徒と争いを起した。摩国鹿兒島県に配流されたが、翌年許された。康治元(元久二年)一四二二(一〇五)

ささきーそういち【佐々木惣一】憲法・行政法学者。

鳥取県出身。京都帝大卒。憲法および行政法の權威として美濃部達吉とともに公法学界の中心的存

川事件で退官。立命館大学総長。第二次世界大戦後、新憲法作成の審議に加わり、「佐々木試案」を作った。文化勲章受章。著書「日本行政法原論」「日本国憲法論」など。明治一一一昭和四〇年（一八七八—一九六五）

ささき・たかうじ（佐々木高氏）南北朝時代の武将
近江國（滋賀県）の豪族。号、道哲。四郎と称した。
足利尊氏の従ひ、室町幕府創設に功があつて、近
江、上総、出雲などの守護をかねる。歌道、香道、
茶道のたしなみも深かつた。徳治元（応安六年）
三〇六（一七三）

ささき たかおき 〔佐々木 隆興〕 医学者 東京出身
ささき たかおき 〔佐々木 隆興〕 医学者 東京出身
京大教授、雲雲堂病院院長、佐々木研究所
所長、癌研、肝臓癌各所長を歴任。たんばく質ア
ミノ酸研究、肝臓癌人生発生の研究でそれぞれ
学士院賞を受賞した。文化勲章受章。明治一一
昭和四一年（二八七八—一九六六）
ささき たかおき 〔佐々木 高綱〕 鎌倉初期の武将。

朝の舉兵に参じ、石橋山の戦いで軍功を立てる。源頼四郎と稱した。定綱の弟。母は源為義の女。源頼宇治川の合戦では名馬生暖(いけずき)で梶原景季と先陣を争ひ名をあげ、功によって備前、安芸、周防などの守護となった。のち賞の薄いのを恨んで出家。生没年不詳。

ささきたかゆき〔佐々木高行〕政治家、侯爵。土佐藩出身。初名は高富、通称三四郎。早くから勤王の志を抱き、土佐倒幕運動の中心となる。明治三年（一八七〇）参議となり、のち司法大輔（たゆう）、工部卿、枢密院顧問官などを歴任。天保元（明治四三年）（一八三〇）―一九〇〇）

ささきたかより〔佐々木高頼〕室町時代の武将。

近江の名族で、六角氏を称する。父政賴。初名四郎。近江国守護。応仁の乱に、山名宗宗の下で細川氏の兵を破り、その後、細川勝元に属した京極氏と近江を争い、これに勝った。乱後、近江にある多くの諸領を獲得し、管理した。永正十七年（一五二〇）没。

ささきちゅうじろう【佐々木忠次郎】昆虫学者。

近代養蚕学・製糸学の開拓者。福井県出身。東京大学理科大学卒業。東京帝大農学部教授。主著に「農作物害虫篇」。安政四～昭和十三年（一八五七～一九三八）

大槻玄沢について蘭学を修め、仙台藩医学校教授となる。仙台藩最初の人体解剖を行ない「存真図

腋」を著わす。寛政二ゝ嘉永元年（一七九〇）一八
四八）

ささきーとうよう【佐々木東洋】医学者。江戸の人。

佐藤泰然のもとで医学を修める。西南の役に軍医として活躍。のち、脚気病院の主任を経て、杏雲堂病院の前身を開設した。明治三十三年（一八九〇）には東京医会を創立して会長となった。天保一〇（一八三九年）大正七年（二八三九）一九一八）

ささきーのぶつな【佐佐木信綱】国文学者。歌人。東

京帝大卒。三重県出身。佐佐木弘綱の長男。号は竹柏園。和歌の歴史的研究、万葉の基礎的研究に尽力。明治和歌革新運動を起し竹柏会を設立。機関誌「心」の花を刊行した。著書に「万葉集の研究」「校本万葉集」。歌集に「おもひ草」「豊旗雲」。門下に川田順、九条武子がいる。明治五—昭和三年（一八七二—一九六二）

ささきひろつな【佐佐木弘綱】国学者。認人。伊勢。石業師の生まれ。信綱の父。号は竹柏園。著書に「古事記歌謡言解」。文政一一～明治二四年（一八八九一～一九一三）

ささきみつぞう【佐々木味津三】小説家。本名光三（みつぞう）。愛知県出身。明治大学政経学科卒業。「石門捕物帖」「旗本退屈男」などを書き、大衆

文学の分野で活躍した。明治二九、昭和九年（八九六—一九三三）ささきもさく（佐佐木茂索）小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し、『文藝春秋』同人として活躍。昭和一〇年（一九三五）菊池寛と芥川賞、直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集

に、春の外装、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七・昭和四一年（一八九四―一九六六）
 〔豆丁〕「さざり豆丁」の変化した語。
 〔季・夏〕・羅葡日辞書〔Ciencia 略〕 Saagunha (ササギノ) タグイ。・日本一鑑 野河話海五・花木 丑 腰
 腰気ササギ 固遇密(クマミ) 遇蔑(マメ)・饅頭
 屋本節用集「小角豆 ササギ」・淨瑠璃・柁持剣本地

四ながいささぎが花はみじかふてみじかい栗の
 発音サザギ 〔名〕① 〔古語〕鵲頭
 「ささぎ」【鶴鷄】名。(「ささぎ」とも)鳥「みそさぎい
 (鶴鷄)」の古名。古事記下・歌謡「雲雀(ひばり)は
 天に翔(か)ける 高行(たかゆき)と 速総別(はやそうべつ)は
 やぶさわけ」佐
 邪岐(ささぎ)捕らさね」・書紀「神代上(兼方本訓
 「白藪(かかみ)の皮を以て舟に為(つく)り、鶴鷄(さ

サキ)の羽を以て衣に為りて略へ鵲鷗(せうしゅう)、此をば娑娑岐(ササキ)と云ふ▽・新撰字鏡)鷗加久支又左々支(鵲鷗説)ササキ小竹漏の約(大言海)。(2)ササイ(小)の義(言元梯)。(3)ササキ(小)の義(名言通)。(4)ササゲ(小細毛)の転呼で小鳥

の意〔日本古語大辞典「松岡静雄」〕。(5)ササキ(小鳥)の義。キは古語で鳥をいう語(東雅)。**〔発音〕**倉史^上

代は『さざき』。平安には『さざき』形がみられるが、第二拍、第三拍の清濁はゆれていたらしい。今史平

安○○○
〔古辞〕書字鏡・和名・色葉・名義・書言

ささきあぶみ【佐佐木鎧】《名》ささきがけ(佐佐木掛)に同じ。●御伽草子・草木太平記(有朋堂文庫版)収「菖蒲作りの太刀をはき、とう駒にささき鎧をきけいでたり」

ささきがけ【佐佐木掛】《名》馬具の鎧(あぶみ)の名

近江国日野(滋賀県蒲生郡日野町)でつくり出した

銚。文板(もんいた)に刺鉄(さすて)の剣(え)り
入れて、左右(みぎひだり)どちらにも表着(うわ)てあるという。佐佐木(ささき)銚(ささき)。
銚(ささき)。野掛(のかけ)。随筆(ずいひつ)・貞丈(さだたけ)筆記(き)「三(さん)・佐々木(ささき)掛(かけ)と
銚(ささき)の事(こと)略(りやく)力車(りきくるま)にかける事(こと)にはあらず五(ご)六(ろく)掛(かけ)加賀(か)賀(か)
などと云(い)く掛(かけ)とは銚(ささき)を作る事(こと)を云(い)ふ」
ささきけん【酒機嫌(しゆきげん)】(名) 酒(しゆ)に酔(よ)ったときの気分(きぶん)。
酔(よ)心地(ち)。一杯機嫌(いぱいきげん)。ささきけん。ささきけん。・酒(しゆ)に酔(よ)ったとき、酒(しゆ)
酔(よ)心地(ち)。一杯機嫌(いぱいきげん)。ささきけん。ささきけん。・酒(しゆ)に酔(よ)ったとき、酒(しゆ)

瑠璃・忌田金鉋卅一四ノウホとよまへ 淫(ささき)んがまだ醒(さ)めぬか。滑稽木七偏人三上座も七人の能楽者(のうが)どもは、春の朝の酒機嫌(ささき)ン) 閑園ササキゲン 禽(う)之田

ささきじんじゃ「佐々伎神社」兵庫県出石郡但東町にある神社。旧県社。祭神は少彦人命(すくなひこなる)のみこと、大彦命(おほひこの)のみこと。産土神(うぶすま)

ふすながみ」として崇敬された。〔采女繪〕
ささぎつきのんじや〔沙沙貴神社〕滋賀県蒲生郡安土町
にある神社。旧県社。祭神は少彦人命（すくなひこな
のみこと）、宇多天皇、大彥命（おおひこなのみこと）な
ど。景行天皇の創建と伝えられる。〔采女繪〕
ささぎつきの『名』衣服の袖に「ささぎ（豆豉）②」を

けること。また、その衣服、ささげつけ。・歌舞伎・満宮菜種御供・上・橘懸りより紅梅姫、振袖、ささぎ・着流しにて出る。・歌舞伎・猿若万代屋・三立・ささぎ・道より、女三人、何れも広袖ささぎ付(ツキ)、着流し・後ろ帯にて略出て来たり。・ささぎにしん(名)・**因幡鱈にしん**を二枚におろし、て干したるもの。北海道刊(「ささぎにし」青森県津軽

ささきび【笹薹】名 イネ科の多年草。屋久島以
 の山野に生える。高さ一・三〜二・五呎。茎と葉は
 サに似ており、キビに似た長さ三〇〜六〇センチダ
 イの花穂をつける。〔発出 倫之田〕

ささきり【笹薹】名 キリギリス科の昆虫。本県
 中部以南の平地に分布。体長二〜一五ミリ。生
 体は小形で細長く、全体が暗緑色で、側面足の先、前

ねなどに黒褐色を帯びる。七、八月ごろ笹の葉の上などでキチ、キチ、キチと続けて鳴く。近似種にホシササキリ、オナガササキリ、コバネササキリ、ウスイロササキリなどがある。〔発音〕ホシササキリ。うゝゝりウ（佐佐木流）〔名〕馬術の一派。近

江国(滋賀県)観音寺城の城主、佐々木義賢を祖とするもの。*武芸小伝「四佐々木左京大夫義賢者、略

好ニ馬芸ニ而善ハ馭ヘ略ヲ推曰佐々木流ニ
リユ一 〔標〕 〔Q〕 〔発音〕 ササキ

さーさく【茶杓】『名』抹茶(まっちゃ)をすくい取るの

木地きじ、塗物などで作じ、珠光彩、利休形などがある。ちやしやく。ちやさじ。俳諧・新增大苧波集油糟夏「あまり暑さにかがみこそすね 若竹をささくにせむと火を置いて」

ささく「差錯」名 いり乱れること。くいちがうこ

と。転じて、あやまり、まちがひ、手違い、哲学字集
 ①「Error 差錯、過失、謬誤」・青春小栗風葉々春・一円
 満なるべき造化の計画も茲(こゝ)に差錯(ササク)を来して
 ②「爾雅注釈云、爽差也」皆謂(みな)用心差
 錯(ササク)ニ專(まか)し ③(突箇)齷(ササ)る
 ささ・く ④「自力下」むささける
 ささ・く ⑤「自力四」語義未詳。花やかに榮える、花やか

意かとする。＊万葉一六三七九「古(いにしへ)狭々す(ササキ)しわね(しきしや)今日(けふ)に子等にいさにとや思はえてある(作者未詳)」。＊武藤本竹取「毛の末には、金(こがね)の光し、ささきたり」
 補注「竹取物語」の例は「ひかりをさきたり」「ひかりしさをさきたり」の本文を有するものもあり、「かか

ささく【**捺**】**「名」**が下二」むさぎある（**捺**）
やきたり」の誤写とする説もある。
ささく【**作**】**「他」**すわって行なう作業。特に囚人
の場合にいう。★太政官達第八十一号明治四年九
月一九日・四六条「未決監に在る者坐作の業を為さん
と請ふときも亦同じ」**〔笑園雑言〕**㊦

ささくさ【笹草】**名** ① ささ笹 ① に同じ。＊風俗歌拾遺 承德本草諸集所収 信濃 駒込左 左久左（ササクサ）や 馬に飼ふなや やはれ 駒に飼ふなや。＊榮麁抄抄二 四句神歌「王子のお前の 笹草（ササクサ）は、駒は食のども 猶繁し」 ② イネ科の多年草。本州中部以西の山林に生える。高さ四〇―九〇センチバ。葉は薄く長さ一五―二〇センチの広披針形で、

五・六枚生じる。夏から秋にかけ、緑色の小穂が円錐形につく。漢名、淡竹葉。ささのはぐさ。
 ＊大和本草九「淡竹ササタサ」本草澤草下に出たり。ささの葉に似たり。＊日本植物名彙編松村任三「ササタササノハタサ 淡竹葉」〔菊池喬之〕
 〔吉澤〕書言
 ささぐま 〔笹熊・籬〕名 〔あなぐま（六熊）の異名。

＊重訂本草綱目啓蒙十四・獸・熊くま まぐま 奥州、
 月形あるを まぐまと云、月形なくして小なるを さ
 さぐまと云 ＊焚火・志賀直哉「屹度笹熊でせう。驚
 かなんかに食はれたのかも知れませんよ。笹熊は弱
 い獣ですからね」(発音ササグマ 補遺⑩)

ささぐも【笹蜘蛛】『名』①蛛形類真正クモ目ササグモ科のクモ。体長は一センチ位。背甲は長卵形で

近くまで上げる。・万葉一九四二〇四「吾が背子が
 擗ささげ」て持てるのはがしはあたかも似るか青き
 蓋さぬがさ」恵行に。『書異記上二一「辨あけの纒
 かづら」を頼ぬか」に著し、赤き幡片はたほけを
 撃ササ」けて、馬に乗り八興福寺本訓釈撃左左介
 天』・源氏宿木主の頭中將さかつきささげて御
 台まゐる。・蘇我三蔵法師伝永久四年三二一
 の僧をして「鮮あさやか」なる華一聲を撃ササ」け
 め、来りて法師に授けしむ。②上へ高くあげる。
 高くさしあげる。かかげる。・小川本願經四分律平
 安初期点此の尼拘律の樹は手を産ササむとする時
 は及べりき。・竹取「つばくらめ手産ササむする時は
 尾をささげて七度めぐらぬ。産み落すめる」。
 ・枕「一二五むとくなるもののおほきなる木の風に吹
 き倒れて根をささげ横たはれ臥せる」。③(2から)
 得意になつて見せびらかす。誇示する。・仮名
 草子伊曾保物語下二二〇「人としてわが誉はまれ
 をささぐる時は、人の憎みをかうむりて、果てにはあ
 やまりをいひ出せる物なまつる」。④神仏、歌
 は死者に供物をたてるまつる。供へる。・仏足石歌
 「釈迦さかの御足跡(みあと)石(いは)に写し置き
 敬ひて後の仏に譲りまつらむ佐々義ササゲ」まう
 して。・大慈恩寺三蔵法師伝承徳三年点一〇「人有
 りて僧檀木香を賣(ササ)けて至れり」。・平家二・康
 頼言「僧求長寿得長寿の礼拝、袖をつらぬ、幣帛(へい
 はく)礼簀を擗(ササ)高良本ルビ」る事ひまなし」
 ⑤目下の者から目上の者へ物をたてるまつる。献上
 する。・獻納する。・書紀雄略二年一月「國書寮
 本訓「彼の疾く行くを推ひて、庭に頓伏(たふれ)て、
 撃ササケ」る所の膜(むく)つけもの」を覆(おほ)し」。
 ・源氏若菜ところにつけたる御贈り物ともささげ
 してまつり給ふ。・大淵代抄「今日本国でも六月
 旦にはどの山よりか内海へ水りよ揚げると云ふも其
 の礼とみへた」。⑥高い大きな声を出す。声をはり
 あげる。・栄花ものとしづくと御声をささげ
 て泣きのしり給へん」。・古本説話集四〇「程もな
 く、渡う声ささげて読みあぐ」。・たまきはる「御つば
 へまゐりて、声をささげささげ」。・ささきはる事申し
 して。⑦自分の真心や愛情などを相手に示し、さし
 出す。相手に尽くす。そそぐ。・因縁幼児を、使用の
 ため抱きあげて前へ差し出す。広島県比婆郡制徳
 島県姫(關國)シサアグ(指桑)の約和句解万葉集
 類林内珠庵雜記和訓聚大言海」。(2)シモシナケク
 の反ソサダの転(名)語記。・関國古事記・金受
 余之① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃

さすがに所々部(しとみ)あまたさげわたしたる所あり」

さういふ「笹子鶯子」(名)中冬のごろ果立する鶯うき「子」の字。季冬・雁列・皆吉夷申・絵の売れし西室のさびれ笹子鳴く。〔閑園繪〕

ささこい「ヨウ」〔笹五位〕(名)サギ科の鳥。全長約五〇センチ。ゴイサに似ているのが小さい。雌雄同色で頭上は藍黒色、くび・面は灰色、背面は青緑色を帯び、後頭に長い冠毛がある。樹林に営巣し、夜間に水辺に出て水生の小動物を食べる。アジア東部に繁殖し、日本には主として本州以南に夏鳥として渡来。みのひ。アムールさぎ。〔季夏〕

ささこし「狹小興」(名)京都貴船神社に振り歩く小さな神興(みこし)。江戸時代、貴船神社の九月の祭に、一日から九日までの間、京都の子どもが市中をかづきまわった小型のもの。後奈良天皇の時、九月に小児の疫病がはやったのを貴船の神のためとし、小さい神興を造ってこれをしめたことに始まるといふ。・日次紀事 九月一日 貴布禰神供 貴布禰狹小神興(ササコ) 今日 至日 洛下見聞 貴布禰早小神興 貴船狹小神興(名)所都鳥島六貴布禰社「小き神興を昇貴舟の狹小興(チヤチヤゴシ)ササコシ」と呼ばれて、町を歩行く此事所々にありといへども、別して子供あまるは、本誓願寺通小川のはと今に有。〔閑園繪之〕

ささこて「篠籠手」(名)しのごて(篠籠手)に同じ。・読本 梅説引張月・戌六二回「荒男等五六十人、黒き衣に黒き頭巾を載たる、篠籠(ササゴ)に木皮の脚絆(あひばり)して長き刀を跨ぎ上りたる」・読本・南総里見八犬伝・四三一回「倒れたる一個ひとりの武士は細腰こくさりの着籠(ササゴ)に龜甲入たる脚盾(かぶた)をうけてしたる」

ささこて「擗」(連動)「ささげて」の意の上代東国方言。ささげ持つて。・万葉二〇四三・五「父母も花にもがやくとくまらば旅は行くとも佐佐己三(ササゴ)行(かむ)ま黒馬当」

ささこ「酒事」(名)「さかご」(酒事)に同じ。・浮世草子・浮世采花 代男三「なる程小盃にてしゃく取は淀の人すみ濁るをや神ぞ知るらん男まざのささ事といふ」・浄瑠璃 冥途飛脚中「女郎さまたちが大ぜい遊びにござんしお客寄つ間のささご」・清元 深山桜及兼樹振(保名)「つらつらと夜をあかしひるねぬ程に思ひつめたに逢ふ夜の嬉しさ」にささごうやめて「語る夜は」

ささこ「つうて」・つげ「笹子峠」 山梨県大月市西端にある峠。秩父山地と御坂(みさか)山地の交差点にあたり、古くから甲州街道の難所として知られた。

閑園ササゴトウゲ 〔繪〕

閑園ササゴトウゲ 〔繪〕

国鉄中央本線笹子駅と初鹿野(はじかの)駅の間にあ
 る鉄道トンネル。明治三五年(一九〇二)完成。全長
 四六五・六尺。(3)甲州街道(国道二〇号線)、山梨県
 大月市と大和村の間に道路トンネル。昭和三十三年(一九五八)開通。全長二九五・三尺。開凿ササ
 トンネル 會②
 ささこもち【笹子餅】(名) 山梨県大月市笹子の名物
 で小判形の餡あん入りの餅。開園ササコモチ
 會②
 ささこや【篠小屋】(名) 富士登山者の宿泊のため、山
 麓から頂上までの道を一目から一〇合目まで等間
 隔に分けて、その一合または半合一〇に設置した石
 室の宿舎のこと。しじや。・日記紀事六月此月
 処々民人攀登富士山へ略坂路中間岩窟構二小屋は、
 謂一篠小屋(ササコヤ)。開園ササコヤ 會②
 ささじま【笹島】(ささしまとも) 姓氏の一つ。
 開園ささじま 會②
 ささじまやき【笹島焼】(名) 陶器の一つ。尾張国笹
 島村(名古屋市中村区笹島町)付近で焼かれた葉焼の
 一種。文化年間(一八〇四)一八、文七という者が焼
 きはじめたといふ。・尾張名所図会前編二愛知郡
 (古事類苑・産業一三)「笹島焼、磁器。広平なる笹島
 にて製す。近來の新製にして、葉焼の模様さまざま
 に色どり、美し陶器なり」開園ささじま 會②
 ささじん・サシ酒麴・井裡シ(名)「味噌をいう
 女房詞。・日葡辞書(酒麴)コサチン。すなわち、
 スカミツ(黍)麴でつくったミソ。女性語。・咄本内
 聞文庫本醒睡笑「なべて上臈がたには、ささじん
 という本を禁中にはまかねかと云ふ。・浮世草子・男性
 大鑑一三「賤しづ」の家の味噌味噌も酒麴ササチ
 ン」と言葉を改め物毎のことやさしくよきを見
 習ひ」・東宝宝記元祿五(一)・五〇とみそはささ
 ちん」・東華三三「穀・略俗間に、味噌味噌といふも
 のの麴と塩とを和して造れるを名づけて、ささちん
 といふ也。是は仏經を書写するに、菩薩の字の文を
 省きて井とする事あり。さればササは菩薩の義也
 也。ちんとは應といふ字の音をもて呼ぶ也」開園
 (1)菩薩の字を略して井と書くところからササは菩薩
 の義、チンは麴。米を菩薩といふところから東雅)。
 (2)ササチン(酒麴の義)和訓聚。(3)ササジン(酒麴
 の義)但言集覧大言海。(4)ササを米と解する説は
 誤り(大言海)。(5)ササはワササのサ、ジンはジ
 ダ(糗粒)の略(志不可却)。
 ささしんたい【坐作進退】(名) 立居ふるまい。身の
 こなし。行儀。周礼夏官・大司馬教坐作進退、疾
 徐疎数之節」開園ささしんたい 會②
 ささすげ【笹管】(名) 植物たがねそう(藜草)の異
 名。・重訂本草綱目啓蒙一六・石草・崖櫻略ささす
 げは一名たがねさう。尾州)

じ。〔附〕會之閉。

ささせ「笹籠」江戸時代、大坂の歌舞伎の品貝（ひい）き連中の団体の名。雑俳・鏡饗にぎやかな笹せも送る法花の葬。雑俳・名付親「銭出して 猿の芝居を見る 笹籠」

ささせ「笹田・細田」（ささせ）とも 姓氏の一つ。

〔附〕會之閉

ささせ「おとこ」とも「小竹田男」（万葉十九・八〇）

二「小竹田丁子（しのだおとこ）」を、昔こう読んだところから出た名。美しい菟原処女（うないおとこ）を、菟原壮子（うないおとこ）と争ったという伝説上の人物。謡曲・求塚「小竹田男ささせ」とも、思沼大夫（ちんのますら）を、同じ日の同じ時わらなき思ひの玉章を通はす」。俳諧「江戸新八百韻「夜寒の簀子ぎちりぎちりと」龍眼、蜘蛛ささせた男の釜の下（籠）成」

ささせ「たけ」〔笹竹〕二「小さい竹の総称。また、それを描いた模様。俳諧「虚栗下下 酒漬常待 姪有人生七 十去年稲 笹竹のとてらを藍に染しに」芭蕉 狩場」の雲に若殿を恋ひ其角」。赤光・斎藤茂吉「死にたまふ母（山ゆゑに）笹竹の食ひにけりははそその母よははそその母よ」 〔附〕會之閉

ささせ「笹母」二「担子菌類フウセンタケ科に属する肉桂色のキノコ。かさは徑二・五センチ。茎は三・八センチ。松林に生じ食用とする。 〔附〕會之閉

ささせ「たけ」〔笹竹〕一「大宮人、大内山」にかかものか。上代の枕詞「さすたけの、中世以降変化したものか。さすたけの。拾遺愚草中「散りもせじ衣にされるさす竹の大宮人のかさす 桜は」。王二集「いくちよの秋をば経ふ」ともさす竹の大内山は色もかはらじ」。続古今「春上・九百千鳥けさ」② 鳴けささ竹の大宮人に初音待たれて 龜山院」竹の節をよ」といふことから、節（よ）と同音の 齡（よ）代「夜」にかかる。続古今「雑下・一七九二」ささせたけの我がよの程の思ひ出しにしはれぬべき一ふしもがな（後醍醐天皇）。続拾遺愚草三・九五〇「さす竹の一夜ばかりの契りにとも忘れぬしの何残らん（源雅喜）。風雅「春上・四七」ささせ竹の夜はにや来つる間近き朝けの窓に鶯の鳴く（藤原実兼）」

ささせ「たき」二「名」芋汁をいう。盗人仲間（隠語）。〔附〕語釈

ささせ「ち」二「名」因国旧暦七月頃のにわか雨。宮崎県日向市美々津郷

ささせ「たて」二「左立」二「名」ささせ（左立）に同じ。

ささせ「だんご」二「団子」二「名」①団子を笹の枝にさしたも。江戸浅草千代紙町田の祭りにこれを神前に供えた。『随筆 浅草志』一「天皇祭礼六月八日、此日団子を簀く、早朝より群集して、是を取得れば病難

を除くとしてあらそひ取る事、近辺氏子の家より出て道にて団子に皆取られ、殺竹計神前へ納め、は神事のやうに成す。②うるち米の粉ともち米の粉をこねて館(あん)を入れ、笹の葉で包んで蒸したものを、新潟県の名物。〔新潟ササナゴ〕(新潟) ③

ささちま【笹葉】(名) 笹の葉でくるんでつくった粽。笹を三角に畳み、これにもち米とうち米を混ぜて荒びきにしたものを包んで結び、蒸したもので、砂糖入りのきな粉をつけて食べる。長野県山ノ内町などの名物。笹巻粽(季・夏)・宗長日記(人)の許より笹巻・せんべい二色送られて心ざしみやまのしげき篠藪数は千秋千べいにしして・俳諧・毛吹草追加上・一原のささ粽と云ふを聞て・たばねてや・一はらの篠粽(巾巾)・俳諧・八番日記(猫の子)のほどく手つきや笹粽(まき)・(新潟) ④

ささづき【査察】(名) 状況を視察すること。・西国立志編(中村正直取八・二五「自ら論敵(ロンドン)中の貧人院に往き、その中の委曲を査察し」・条約改正論(島田三郎)・「其差異の程度を比較せず事情の如何を査察せず」(新潟) ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづり【作竹】(名) ①刀剣の縁頭(ふちがし)や鎧(こじり)などに笹の葉の模様をつけること。また、その刀。②キヌやサヨリなどの身の細い魚を刺身にする時の切り方。三枚におろした身を斜めに切ると切り口が笹の形になるのでこの名がある。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

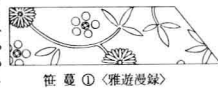
ささづつ【酒筒】(名) 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さけづつ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) (ささばたき(笹葉))の变化した語。・滑稽本「浮世風呂前上」お福宜(ねき)の占(うらね)も、市女(いちめ)の笹(ササ)ばたきもいらね。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) 着物の襟の形が、細長く、笹の葉のようになったもの。多くは男子用。・雑俳・新編柳傳(二三)笹葉に気がねは娘の蔽にらめ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) 五徳で爪の上方の曲がりやあいうの、笹の葉を折ったような形のもの。その爪の長いものを長笹または大長爪、短いものを中爪、小さいものを小笹または小爪といふ。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) ①笹の葉を蔓草に似たように模した模様の。②(ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿



笹葉 ①(遊遊漫録)

ささづばたき【笹葉】(名) (ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) (ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) (ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) (ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささづばたき【笹葉】(名) (ささづばたき)の略。・古今名物類聚(名物類之部)「笹づる」。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

上鬼城「蘆さくや琵琶湖に落つるささ流れ」〔新潟) ササナガレ(新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 冬、鶯(うぐいす)の子がまだ声が整わず舌鼓を打つようにチチと鳴くこと。また、その鳴き声。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) 植物。こなき(小葉葱)の異名。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

も変らぬ染め物は、そも何々。一に友輔、二に鏡、三に連(ササナミ、四に紋)。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

湖の西南沿岸地方である。また、近江国滋賀県(古名)・万葉集・三・「左近雅彦(ササナミ)の志賀の大わだよりむとも昔の人にまたも逢はれやも種人麻呂」〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

ささなみ【笹葉】(名) (ささなみ)の略。〔新潟) ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

の流れを汲みて、ささ波の、寄り来る人に、あつらへて(崇徳院)・新葉(冬・四六)・志賀の浦や月澄み渡るささ浪の夜はすがりに千鳥鳴くら(後村上院)

【園圃】**ささなみのやしろ**・ささなみのヤシ(泊泊舎集)・江戸後期の私家集。八巻。清水浜臣作の詠歌をその子の光房が編集したもの。文政二年(一八二九)刊。四季・恋・雑・雑体・部類・短歌一六二首、旋頭歌七首を収める。【園圃】ササナミノヤシ

ささなみもく・【小波全】**名**・本(板の木目)の一種。こまかい波状になったもの。
ささなみや・【細波】**名**・(ささなみやとも)①「近江・志賀」長等・三井など、近江国(滋賀県)琵琶湖南西岸の地名にかゝる。・神楽歌・小前歌・細波(本佐々見也ササナミヤ)・滋賀の辛路や御船も(わ)・(く)女の佳き・拾遺・雑上・四八三・「ささなみや近江」の宮は名のみして霞たなびき宮木なり(柿本麻呂)・拾遺・哀傷・一三三六・「ささなみや志賀の浦風」かばかり心の涼しかららん・藤原公任・千載・春上・六六・「ささなみや志賀の都はありにしを昔ながらの山ざくらかなよみ人しらす」
②ささ波が寄る意から、「寄る」にかゝる。・新続古今・恋二・一五・ささ波よるべも知らず成にけり逢ふはかた田のあまの増舟(道玄)③ささ波の寄せる浜の意から、「浜」にかゝる。・謡曲・関寺小町・「近江の湖(うみ)のささ波や、浜の真砂は尽くとも、浜の真砂は尽くとも、詠む言の葉はよも尽きじ」・浄瑠璃・順光跡目論三・「ささなみやささなみや浜の真砂は尽くとも源氏の御代はよも尽きじ」

ささなる・【細鳴】**自**「四」小刻みに鳴る。小さな音をたてて鳴る。・桐一葉・坪内逍遙二・「何にもせよ、桜が枝に黄金(こがね)の鈴、月に照りほえ、ささ鳴るは、はて面白き風情ぢやなア」【園圃】**ささ**に「こり」・【小濁】**名**・水などが少し濁ること。わずかのこり。・俳諧・芭蕉庵・小文庫・「郭公鳴や湖水のささにこり」【園圃】ササニ「こり」
ささにんどう・【忍忍冬】**名**・植物「つばめおと」・燕万年青の異名。・日本植物名鑑・松村任三・「タウチサウ・ササ・インドウツ・バメ・マモト」【園圃】ササニンドー

ささぬけ・【名】雨漏りを誇張するという語。雨などがあざあざ漏ること。・浮世草子・西鶴置土産・四三・「取ぶきやねのささぬけするを、此四年も簪(かんざし)かへる事のなりかぬ人」・浮世草子・傾城色三味線・京一・「我家のとより、き屋根のささぬけを、背かへる力もなくて」・雑俳・湯たらひ・「これはさて仏のうへがささぬけじ」
ささぬけりゅう・リウ【世沼流】**名**・水泳の流派の一つ。向井流の高弟、下総国佐倉藩士笹沼勝用が唱えたもの。その泳法は向井流と同じ。【園圃】ササヌメリ

【世野】**姓氏**の一つ。【園圃】**ささ**の「こんざ」・【笹野権三】・浄瑠璃・「鍾の権三・重帷子(やりの)ごんざ・かたかなたばら」(近松左衛門作)の登場人物。浅香山之進の妻おとしと不義の汚名を着せられて、駆け落ちし、おとしの進に討たれる。享保二年(一七一七)、大坂高麗橋の妻敵討(めがたさうち)を題材として劇化。笹野権三郎に取材した歌謡の流行をとりいれて、「鍾の権三」としたものの。

ささのこんざ・【世野権三】・宝蔵院流の槍術家。名は義胤。紀州藩士。のち、筑後柳川藩士(三百石)。父の仇討と美男とで知られ、槍の権三とうたわれた。寛永一慶安(一六四一・五二)頃の人。
ささのさいぞう・【ササノ】**笹野才蔵**名・①「宿禰の呪符として宿(やと)どに書く名」・俳諧・二葉集「り」懸て越す山は宿禰・宿禰は笹の才蔵とうたれた(如雲)②福岡市博多、および宮崎県佐土原から産する、桜安に袴をはいた猿の土人形。佐土原産のものは宿禰除(ほうそう)とよとして神棚にまつる。また、博多地方ではその像を印刷した紙を家の出入口にはって、宿禰除、麻疹除などのまじないとする。
ささのつゆ・【笹の露】**地名**・神曲。生田りくた流。文政・天保(一八一四・四四)頃、京都の菊岡校校が三味線曲として作曲。これに八重崎校が筆の字を加えて合奏曲とした。島田西三作詞で、和漢の故事を並べて酒の徳をたたえたもの。手聞・問答に重点をおいた手事物で、手事の中に掛け合いの非常に多い曲。
ささのはうちわ・【ちほ】**笹葉団扇**名・紋所の名。笹の葉を羽団扇(はうちわ)の形に組み合わせたもの。【園圃】**ささ**の「はうちわ」

ささのはが・【名】**笹葉**名・インゲイ科の淡水産二枚貝。琵琶湖の特産種。殻長約九センチ。殻は細長く厚くて堅い。老成した貝の殻皮は黒い。笹の葉のような形をしているのでこの名がある。・重訂本草綱目啓蒙・四二・蚌蛤馬刀水中にやらひさのはがひなが、江州略湖水中に生ず。形蚌に似て狭細なり。一頭は尖りて小刀の状の如し。【園圃】ササノハガ

ささのはが・【名】**笹葉**名・インゲイ科の淡水産二枚貝。琵琶湖の特産種。殻長約九センチ。殻は細長く厚くて堅い。老成した貝の殻皮は黒い。笹の葉のような形をしているのでこの名がある。・重訂本草綱目啓蒙・四二・蚌蛤馬刀水中にやらひさのはがひなが、江州略湖水中に生ず。形蚌に似て狭細なり。一頭は尖りて小刀の状の如し。【園圃】ササノハガ

ノハクサ・淡竹葉
ささのはこ・【名】**笹葉小紋**名・笹の葉を染めだした小紋。・浄瑠璃・妹背山婦女庭訓三・「京の水色よい染め上げの、この茶小紋に見初めて染めて、酔うてじやらの笹の葉小紋」【園圃】**ささ**の「はこ」

ささのくは・【名】**笹葉**名・ペラ科の海魚。体長二五センチに達する。体はやや側扁し、吻(くちばし)がとがる。体色は雌雄で異なり、雄は緑青色で、頭部に黄赤色の網目模様があり、背に黒褐色の縦帯がある。雌は帯赤色で、頭部背面に幅の狭い黒色縞があり、背の基部に二列の帯黄白色斑が並ぶ。ペラ類の中では美味で、煮付けなどにする。本州中部以南の海藻の多い岩礁付近にすむ。あかべら、ひめぎぞ。【園圃】**ささ**の「くは」

ささのほり・【世野】**名**・郷土玩具の一つ。サワグルミ、アオハダなどに素朴な彫りと削削(けずり)かけ、をほこしたものの。山形県米沢市世野町の世野親音で、旧暦六月と七月の祭礼のときに売られる。【園圃】**ささ**の「ほり」

ささのみ・【酒飲】**名**・「さけのみ(酒飲)」と同じ。・狂言記・貫井・わらはがつれや、何ともかともならぬささのみ御さるが、酔狂をしられて迷惑致します
ささのみね・【笹の峰】**名**・京都市と大津市の境にある比叡山・横川(よかわ)の北の峰。京都市左京区八瀬から大津市御木へ越える峠道が通じ、途中から分かれて横川中堂に至る。平道・八山門・篠原・篠原・葉王坂など申すささの峰を渡り、横川の解脱谷坂場、御所になる。・太平記・一七・山門政事・大講堂の鐘を鳴らして事の急を告げたりける間、篠(ササ)の葉(み)を堅めんとて、昨日横川へ向けられたりける。【園圃】**ささ**の「のみ」

ささばし・【世野】**名**・「かたつむり(蝸牛)」の異名。・俳言・見聞・ささ(へうし)蝸牛
ささばえんじき・【世野延胡索】**名**・ヤマエンゴサクの変種。本州中部の山地に生える。葉の裂片が細い線状楕円形で先とはとがる。【園圃】ササバエンゴサク

ささばし・【世野】**名**・「かたつむり(蝸牛)」の異名。・俳言・見聞・ささ(へうし)蝸牛
ささばえんじき・【世野延胡索】**名**・ヤマエンゴサクの変種。本州中部の山地に生える。葉の裂片が細い線状楕円形で先とはとがる。【園圃】ササバエンゴサク

ささばし・【世野】**名**・「かたつむり(蝸牛)」の異名。・俳言・見聞・ささ(へうし)蝸牛
ささばえんじき・【世野延胡索】**名**・ヤマエンゴサクの変種。本州中部の山地に生える。葉の裂片が細い線状楕円形で先とはとがる。【園圃】ササバエンゴサク

ささばし・【世野】**名**・「かたつむり(蝸牛)」の異名。・俳言・見聞・ささ(へうし)蝸牛
ささばえんじき・【世野延胡索】**名**・ヤマエンゴサクの変種。本州中部の山地に生える。葉の裂片が細い線状楕円形で先とはとがる。【園圃】ササバエンゴサク

に貨(まじ)鉤狹狹貨(ササマチチ)と言たまひに記す。

ささまめこ〔名〕十日戌(と)おかえびす(す)の小宝を結びつけた笹をかついで行く時はやし文句。ささまめこ。浄瑠璃・双蝶曲・曲日記二「進上札の立派な手代、往住往け、ささまめここと、行過ぐるをば、浄瑠璃・替唱歌系の時雨下口久三が担(か)けたささまめこえだめ」

ささまめこ曲日記二「お山と一つ所に酒を飲み、笹まめこうであらうがなと、舟を眺めつけ脱つて」

ささまめこしゆえ(浄九折)〔名〕足利尊氏(の)の佩用と伝える草包太刀(か)わつみのたちのつくり。その金具がすべて笹文でできているため、笹九折の呼称がある。草包太刀は南北朝から室町期に流行した太刀拵で、笹九折は近世の模造品も多い。

ささみ〔身土〕〔名〕(その形が笹の葉に似ているところからい)鶏の胸部の肉に上等の肉と似ている。歌舞伎小袖竹筒色越(十六夜清心)・五立・旦那様とお婆は、笹身の附た正身しやうみ斗り。骨と皮はお下したに出て、お米どんとわしが食物くいものさ。

〔関連語〕①

ささみ〔名〕肉②醬油(しょうゆ)の表面に浮かぶ白い皮。山口県豊浦郡79 対馬郡 83 杵崎(ささび)味(み)や(や)さみず(み)細水(み)わすかな水。また、少しの水のたまっているところで、小さな沼などいへ。為相本竹目集「ささみづにすぎきざせり春ごとく。さすみす民のしわざなるべし」・続古今夏二三七「五月雨(さみだれ)はなるにもりしさ水のあぜ越す少しにけるかな・奥徳院」・和訓栞「ささみず、少しある水也といへり。又ささみ水といへり。又ささみこりともいへり。漢液也」

ささみち〔笹道〕〔名〕笹が生い茂った道。俳諧卯辰展集「た菜刈りこかす茅の笹道芭蕉」・霰降左の山は宮の寺北枝」

〔関連語〕①②

ささみどり〔笹緑〕〔名〕笹の実の異称か。〔補遺〕俚言集覧は「ささみどり、竹の実也じねんごいう」とするが、「重訂本草綱目啓蒙」三「苞木には竹竹略実の名発明に出。俗名ささめくりじねんご」とある。

〔関連語〕③

ささみの〔名〕ささめで作った蓑(みの)。ささめのの形の手方掬い二「台、下は其儘一上に茶入ささみ耳」

〔関連語〕④

ささみ〔笹耳〕〔名〕茶入、水指、花瓶などに、笹の葉の形の手方掬い二「台、下は其儘一上に茶入ささみ耳、中盆になつめ」

〔関連語〕⑤

ささむしろう「世説」名。笹を編んで作った敷物。新撰六帖「二風かよふ藤原宿のささむしろ木陰ならねど夕すずみよ藤原信実」○關西ササメムシロの中略(和訓栞後編) 關西會之公

ささむすび「世説」名。①笹を、紐を結んだような形にしたもの。○榮應秘抄「二四句神歌(輪鼓りうち)二輪遣わちがへささむすび、顔顔前垂かうけちまへだり」の寄生木(はや)の鹿の子結び。○新撰六帖「六の契つころはかたちひなるささむすびよの報い、あつりつらしな藤原知家」。虎寛本狂言「聞頭」「しゅくし」結びにむすびや。山口結びに風車

②①を図案化した紋の名。 關西會之公

ささむたじんじや「西条多神社」大分市上栗田(かみきよた)にある神社。天照大神社。祭神は、月読尊(みよのみこと)。天照大神(あまてらすおみ)かきよたみ。天忍穂耳命(あまのおしほみみのみこと)。応神天皇のとき、武内宿禰が創建したと伝えられる。中世以後大友氏など領主の崇敬を受けた。豊後国一の宮。 關西會之公

ささめ「私語」名。「ささめ」とも「ささめごと(私語)」の略。○浮世草子「近代體隠者」二四「一生おんや」に私語。ササメ草(ササメ)絶たへにじよとおもへば」○浄瑠璃「ササメ二枚絵草紙」上人のおもはで肌(はだ)ふれて、おきつまろびつさめして」○歌謡「琴線(ことづな)の糸二二八・誰が袖(そで)割れて今はた物思ふにも、ありし私語(ささめ)の真(ま)ぞならば、語りあふ頼も程(ほど)なき」

ささめ 言う。ささやく。○女中詞(元禄五年「一、ささめ云々や。ささやく。○木目もくめ)の細かいもの。ささめ【細目】名。木目もくめの細かいもの。ささめ【細目】①原野や湿地などに生えるササガヤ、チガヤ、ハマスガ、クダなどの草をいうか。養(みの)などに編んで用いたという。○小川本願經(四分律平安初期点「群比丘、芒草(そうそう)・婆遼草(はりょうそう)を著れた草屨(わらじ)を以て」。散木奇歌集「恋上(こいの上)め刈るあら田の沢にたつたみもみの為(ため)にこそ袖もぬるらめ」。○名語記「八養に生する草をささめとなづく如何、沙(さ)と豆(まめ)もかけり、世はせはせとの反(さか)すはすも同じ、すぢのほそき心也」

②ささめの養(みの)の略。○夫木二八「山がつの結びてかくくささめこそ衣の閑と雨を透(とお)かぬ寂蓮」○補注①について、日本植物名彙編(村任三)に「ササメ 莠(やぶ)と挙(あ)げているが、これは現在のササガヤに当たる。 關西會之公

(1)ササメ(細小群の約か(大言海。細小な草であるのて名づけられたものか(和訓栞。 (2)セバセバラセの反(名語記。 關西會之公

ささめの養(みの)「ささみの」に同じ。○月讀五

「五雨にささめきのものも枯らしててぬれぬれぞ
行く野原しの家々光の」・俳諧松窓句集続編
秋ノ戸口にささめきの翼をぬぎ給ふ所となく
さまめ〔名〕蝶(わらびの繊維を粉にして香煎こう
せん)にした。その槽(かす)。
さまめ〔名〕波の異称。・古今打開上「わたつみのし
らさまめこそ海人(あま)人のうきつつむいのり釣
りに行くわたつみと海底底い」。さまめとは浪を云
ふなり。うきつつむとは舟をいふ也。
さまめ〔名〕因國魚の鰓(えら)。北海道・
岩手県伊豆宮城県登米郡秋田県伊豆八丈島中
之郷御
さまめ〔名〕海産のシジミの一つ。殻は白く、表面に
粗雑な輪脈がある。・重訂本草綱目啓蒙四二・蚌蛤
「蛎略又海中に産し、皺粗くし、色白き者を」とさ
めと云。「團圓殼に刻み目があり、あらいでザラザ
ラ目の義か大言海」。
ざざめくよ【他サダ】(めかすは接尾語)ささめ
くようにする。①ざざと音を立てる。ざざつかせ
る。・源平盛衰記一・頼朝論事三枚皮威をどしの
大荒目の鎧(よろい)、草摺面(さすりめん)にざざめ
めかし「承久軍物語三」指おもてもふらず、ざざ
めかひてわたしけり。・義経紀四・義経都落の事「吹
きても来て帆にひしひしと当るとすれば、風に
つきてざざめか走りけるが」②にぎやかに飾
てうかうかとしてささめかす由にあるものをかし。
・毛詩抄京大二十冊本五時はにささめかした事斗
云て「御伽草子美人かくらべ宝町時代物語集所収」
「御こし十御ちや美ばかりりつづささめかいて
よみづまふで有けり」・日葡辞書「フネ、クルマ、ウ
マヲ zazamecari ザメカス」・浮世草子・施久一
世下「一歩行かちて往くかたへも大親龍(おほの
りゅう)のをささめか見したる是(これ)よし」〔関園
愈之因〕

ざざめき【私語】〔名〕ささめくこと。また、そのこ
と。特に、男女間のちつこ。恋のささやき。・海道
記「浦原より木瀬川、貴妃の私語(ささめき)」、再び唐
帝の思(おもひ)に還る。みだれ髪(みだれかみ)謝野品子膳
脂餐「夜の帳にささめき尽きし星の今を下界(よ)の人
の髪のはつれ」〔補注〕桐の花北原白秋ふさぎの虫「
には蜜(みつ)の如(ごと)くなつたか抱腹(ほうぶく)も千言万句(せんごんばくご)の誓
ひも飲語(のみことば)サダメキもと」「ささめきの形がみられ
る」〔関園愈之因〕

ざざめき【名】にぎやかな音や声。ざわめき。・あ
ひひめき二葉亭四迷歌「それは春先る。面白さう
な笑ふやうなささめきでもなく、夏のゆるやかなそ
よでもなく」・因はれた文芸島村抱月「一耳を
欲(ほ)せばつれば時略四方もたひたひたと浪の
ささめきのみ聞こゆ」・家族会議(横光利一)不穩

な空気が群衆の顔に現れて、原因不明のささめきが
だんだん高くなっていた」 〔閑園會之田〕 余之サ
サメキ

ささめきこと「私語」名 ひそひそはなし。内証話。
ささめきこと。ささやきこと。源氏「若菜上」あやし
く、うちうちにたてて心をする御ささめき事ともの、
おのづからひろごりて、心をすくす人々多かりけり」
〔閑園ササメキゴト〕 余之田

ささめきばなし「名」にきやかなさまにする話。歌
舞伎・博多小女郎浪枕・文字ヶ関元船の場とくこ
んな晩は賑やかにかさめき話をして、縁起を祝ふが
よい」

ささめく「自カ四」①ささやきと音がする。小大
君集「竹のありける所に、風のいみじうささめきけれ
ば」②低い声で話す。ひそひそと音。耳打ちす
る。ささやく。蜻蛉下・天延二年五月「ある者、女
神（めが）はに衣きぬ」縫ひてたまつこそよか
なれ。さしたまときよりきてささめければ、落澤二
「かの人々笑はせよとささめき給ふを知らで」

・枕二七五大蔵卿ばかり耳とき人とはなし「この中將
に扇の絵のこといへ」とささめければ、今、かの君立ち給
ひなんにを、いとみそかにひ入るるを、源氏な
真木柱「この世に目なぬめまめ人をしも、これぞな
どめで、ささめきささやく声としるし」・栄花初
花「何事にかあらん、うち言ひつささめき笑ふも、
恥づかしきまで思はれて」・宇治拾遺一〇一「応
天門の前を通りけるに、人のけはひしてささめき

③ひそかに噂（うわさ）をする。源氏「真木柱」おの
づから人のをささめき事、語り伝へつ、次々に聞き
もらしつ、ありがたき世語りこそささめきける」
・栄花補々の別世の中にひさめきまつる事共の、
あるべきさまに人々いひ定めて、増鏡八・あすか
川「あさまだし御事さへありて、それゆゑくれさせ
給へるなど、ささめき人も侍りけり」④胸さわぎ
がする。日御辞書「ムネガ shimeki (ササメキ)」

閑園(1)ササは細の義「大言海」。(2)上には言わず、
下にささぐといひ義から、ササはシタタの反「名
語記」。(3)ササメゴト（小語）の略語「類聚名物考」。

閑園會之田 余之田
ささめく「自カ四」①ささめくとも騒々しく音
をたてる。ささめく。②ささわと音をたてる。
・御伽草子「唐草草子八百八つのみす藤すだれ」の
几帳もささめいて、仮名草子「恨の介上」御堂の御
簾もささめいて、坊舎も揺（ゆ）らばかりなり」・思
出の記「徳富蘆花」・「一程程までやや接（つ）ひるむて
見へた幅が唯だつた一瞬の間（ま）に接（つ）何処を見
てもささわさわささわささめいては露を揺りこぼし
て居ると」②大勢でにぎやかに話をし、あた
りががやがやする。ざんざめく。落澤一「御乳母
かの殿なりける人を知りたりけるを、よろこび給ひ

て、ささめき騒ぎ給ひて」・平家一七上「都落つね
の御所のかた、よにさながらし給へば」・中華若木
詩抄「中花見の貴族如雲如霞に」ささめく」
・ロドリゲス日本大文典「ワウセイ shadative ザサ
メキ」トヲツ」・浄瑠璃「平家女護馬三」うたひ
おはれば、一座の人よろこびささめきたまひけり」
・黄表紙「心学早稲上玉のごときくめの男子（なんし）
をまふければ、家内祝詞をのべてささめきける」
・人情本「春色梅児養馬三」三駒「泉水の向ふはさ
さめく広風さき、終日過しし酒宴（ささめき）も」・青
春「小栗風雲」春二「ガヤガヤと」類り女工の群が噂
（ササ）き過ぎた後から」③はなやかに時めく。
はなやぐ。九州問答「晩席のささめきたる詩にも芳
り侍るにや」・史記抄「一・商君列伝「いかに富た
とも功がない者は、ささめかせぬぞ。莽莽はささめ
くぞ」・草枕夏目漱石「六・金屏を背に、銀燭を前に、
春の宵の一刻を千金と、ささめき暮らすにこそ然
べき此装と」閑園(1)ササは浪の音で、それが案の
音に似るところから転義した「俳言集大言海」。

(2)ササラメタの義「言元梯」。(3)ササハメの義。
人そよめくの意「類聚名物考」。(4)閑園會之中世は「さ
さめく」近世は「ささめく」ささめくとの両様か。
余之田 今更江戸 ●●●●● 余之田 閑園會・文明
伊予・類聚名物考

ささめくこと「私語」名「ささめくこと」「ささめ
くこと」を、声をそめて話すこと。また、そのことば。
ささやき。①ひそひそ話。内証話。ささめきこと。
・観音院本名義抄「私語 ササメコ」・ささめくこと
上「これは伏見ふせや」がしたのささめくことなれば、
恋のささやき。・為忠集「うらやまし今宵（こよひ）は
あはむ七夕（たなばた）のささめくことせむ積る」とは
い。仮名草子「恨の介下」よすがの物語、誠に
驕（おご）り宮のささめくこと、狂言綺語（きぎよ）の詰言（むつ
ごと）」。浮世草子「男大鑑四」・「免角（みづか）とく」の
ささめく若々家なり。人情本「春色梅児養馬三」
一七駒「七年の古きをこに繰返す。ささめくことさ
へ、あやしこそ、娘心に思ふなるべし」・多情多恨
（尾崎紅葉）後・五二「他愛無私事（ササメコ）は
かりに酔はれてゐたのである」(二)ささめくこと
連歌論書。二巻。心敬著。寛正四年（一四六三）執筆
のち改訂増補を加え、現在異本が二種ある。連歌の
歴史、中世の作法などを問答体で細かく説明したの
性（しやう）を説き、連歌修行即仏道修行といふ人格主義的
理想論を展開。閑園(1)ササメゴトの略「大言海」。
コト（小耳）の義「言元梯」。(3)ササ
メコ（小耳）の義「言元梯」。(4)閑園ササメゴト 余之

●「は」●「は」 閑園會・文明・伊予・類聚名物考
ささめくこと「細雪」名「こまかに降りしける雪。
また、雨をいいて降る雪。季冬」。古今打聞「上」さ
さめ雪ふりし宿の庭の面に見るに心もあへずざり
けり。ささめ雪ふりしとは広くふる雪也。又こま
かにふるを云ふ儀もあり」・三小説。谷崎潤一郎
作。昭和一八年（一九四三）年三成立。大阪船場
の没落商家時國（まきお）家の美貌の四人姉妹を、
四季おりおりの風流を背景に風俗絵巻風に描きわ
ける。〔閑園會之田〕 余之田

ささめくこと「植物やなきも柳葉」の別名。
季夏。重訂本草綱目啓蒙「五・水草」水藻略「馬
藻やなきもささめ水戸」ささめ 溝瀆流水中に多
し。日本植物名彙編「松村任三」ササメ 馬藻 閑
園會之田

ささめく「餅餅」佐々餅「名」餅菓子の一つ。米の粉
をこねたものを茹（ゆ）で、白で搗（う）いて餅を包み、
蓬の葉の形につくったもの。梔子（う）ちなし」または
蓬の汁で黄（き）青などの色をつける。一説に「佐々餅」
と書いて佐々氏の作りだしたのといふ。花餅。さ
さめち。料理物語「一八」ささ餅。うるの米を上
白にして、よくこねたは、ささ水で又しつむまでゆ
で候、あげて、青はよもぎの汁に入ると、紫はきり
ははくちなし、青はよもぎの汁に入ると、紫はきり
大矢数「一五」御見舞もへき背也餅餅も 鯛屋か軒
に二三人より。人倫訓蒙図彙「六」餅餅 大仏の前に
住して大仏餅と号して其名高し略佐々餅（ササメ
チ、鶏餅、野郎餅等品々」・本朝食鑑「二」佐佐餅者佐
佐氏家所造之餅」因「端午の節供につくる餅の
一種。餅の葉で巻き、または餅の葉の上にならべる。
青森県上北郡野辺地町 宮城県東部郡深沢町 秋田県
鹿角郡 ②六月の田祭から夏にかけてつくくる餅。
笹の葉で十文字に包む。富山県瀧波町 閑園會之田

閑園會之田 余之田
ささめくこと「笹」姓氏の一つ。〔閑園會之田〕 余之田
ささめくこと「笹」植物「ぶなぐさ（小笹）」
の異名。重訂本草綱目啓蒙「二・蘭草」蓋草「略」こ
ぶなぐさ 京都ささめくこと 江州 かいなぐさ 播州
筑前

ささや「笹屋」名「名」①笹の葉で屋根を葺（ふ）い
た粗末な小屋。今鏡八・花のあるじ「耳（みみ）さきわ
づらふ賤（し）のささやを」・万代恋「一」我が恋は
賤のささやの苦をあらみりやねん時雨ふる頃
（後鳥羽院）。御室五十首さきも世を過ぐしける
とよそに見しひささやにいくとよまりぬへ守寛
法親王」②文楽人形のかしら「娘の一種。道行
初音旅の静御前など時代物の娘の役に使う」。

江戶時代、京都室町にあった呉服所（こふくじょ）。

・浮世草子「世間胸算用四」・「例年の衣きぬ」くば
りてと、略「笹屋（ササヤ）」にて調のへ、それぞりに給
ひりける」③江戸時代、江戸本郷にあり、笹屋の
目業として目業を売っていたこと有名な店。・雑
俳「柳多留」一六「笹屋のけんへき御利益の善光寺」
・歌舞伎「霜夜鐘十字辻第三幕」不図眼病を煩ひまし
たが、さしたる事とも存じませず、先ず笹屋（ササヤ）
の振出しに東法寺の目薬位で内療治をして居る内」

③江戸時代、下総行徳にあったそば屋。とくに、う
どんで知られる。合巻「金草鞋」五「若竹の笹屋（さ
さや）といへば名物はのびる間のなき饅頭蕎麦なり」
閑園會之田

ささやいこと「囁語」名「ささやきことと囁語」の
変化した語。色葉字類抄「私語 ササヤイササヤ」
ササメコト 耳語同。耳事談四・義家因碩執事「中
間郎等一人出来、義家か耳にささやい事す」 閑
園會之田

ささやいこと「細」形動（後世は「ささや」とも）
形がいかに小さく好ましく見えるさま。小さくま
とまてこぢまりとっているさま。細かなさま。
・宇津保国譲上「中納言殿はいとささやかになれた
る人のうらぶじきなり」・源氏花散里さま義家
なる家の、木立などしはらばらに、書院部本名義抄
「細」季云 遊仙窟細々細々説俗夜賀賀利ササヤカ
ナリ」・徒然草「三九」秋の草は、略いづれもいと
高からずささやかなる増かには、繁かぬよ
・浮世草子「好色金丹」五四「萩葉の垣ささやかに
山吹の掃り花三つ四つ二つ開きたるに寒菊はまだ害
也」・書言字考用集九「細々許ササヤカ遊仙」
・人情本「仮名文章娘用・前・発端」三すち町のほと
りにささやかなる家を借りて、②ささや細いさ
ま。繊細なさま。・浜松中納言「二ゆるさされありつる
足をさへ給へか」と、引き寄せ給へばにはひあり
といみじうさやかに、③おぼろげでないさま。
わすかなさま。形ばかりのさま。・夜明け前「島崎藤
村」第二下「八四」短冊を取り寄せたり、互に歌を
よみかたりたりするやうな、ささやかな席が開けた」
閑園(1)ササは細の義。ヤカは接尾語「大言海」。(2)
イササカの略転「万葉代匠記」。(3)ササヤカ（小々
気）の義「日本語原典」林葉園。(4)ササは小々。日
光は小に止つてよいよアカ（明）なりといひ義「国語
本義」。(5)シナシナヤカの義「名語記」。

閑園會之田 余之田
ささやかし「名」ささやかしこと、静かに揺り動かす
こと。・七十一「番歌合」九番「ささやかしがたらぬ
げな。かみす」。

ささやかし「他サ四」静かに揺り動かす。ゆらゆら
させる。

ささやかし「囁私語」名「ささやきこととささやかしこと」

ささやかし「囁私語」名「ささやきこととささやかしこと」

ささやかし「囁私語」名「ささやきこととささやかしこと」

ささやかし「囁私語」名「ささやきこととささやかしこと」

とば。ひとそつと語。耳うち。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。・浄瑠璃・傾城反魂香・「あさのささめきはなんじや。知らぬ。聞いた迄と耳をよせ。・はやり唄・小杉天外」七「快き夏の囁語ササヤキ」を聞く如くである。・草わかは浦原有明がすかに胸に「そは似たりけり」かの唄に、あたなる人の私語（ササヤキ）に。・高瀬舟・森崎樹・あたりがひっそりとして、只軸に割かれる水のささやきを聞くのみである。〔園圃會之田〕余之①

ささやき 千里（せんり）内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のもれやすく、また広がるのが速いことのため。こそ三里。ささやき八丁。〔園圃淮南子・説林訓〕に「附・耳之言、聞於千里也」という句がみられる。

ささやき 橋（はし）夜、だれもないのに人がささやくような音がきこえるという橋。越後など各地にあつて、だれかが密語をかわしたという伝説や橋占、辻占などに関係づけられることが多い。ささやき橋。夫木二「熊野なるおとなし川にわたさはささやきのしほのびのびによみ人しらす」。・俳諧・非礼下・代は塩焔の音なしの川・幽山」からくり・ささやきの橋取はなし素堂。〔園圃會之田〕園圃文明書

ささやき 八丁（はちぢょう）「ささやき 囁千里（せんり）に同じ。・俳諧・毛吹草二「ささやき八丁（はちぢょう）」・浄瑠璃・右大将鎌倉実記十四私語八町（ササヤキ）はつチャウ」・景時間取り・何ちゃ

静は腹が痛い。ささやきぐさ 〔囁草〕一名 ①植物「たけにぐさ（竹似草）」の異名。・書言字考節用集十六「園圃・ササヤキサ」・重訂本草綱目啓蒙一三「毒草・蘆麻・略（附録）博落廻略・ささやきぐさ」 ②植物「あかそ（赤麻）」の異名。・重訂本草綱目啓蒙一三「限草・苧麻・略」一種あかそと呼ぶあり。一名ささやきぐさ。ささやきぐさしやくきくさ皆同名あり。〔園圃〕ササはシシ（藟）の転ヤキはヤクで、毒をもって倒す意か〔大言海〕。

〔園圃〕ササヤキ 〔會之田〕園圃書

ささやき ひとそつと語。耳うち。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。・浄瑠璃・傾城反魂香・「あさのささめきはなんじや。知らぬ。聞いた迄と耳をよせ。・はやり唄・小杉天外」七「快き夏の囁語ササヤキ」を聞く如くである。・草わかは浦原有明がすかに胸に「そは似たりけり」かの唄に、あたなる人の私語（ササヤキ）に。・高瀬舟・森崎樹・あたりがひっそりとして、只軸に割かれる水のささやきを聞くのみである。〔園圃會之田〕余之①

ささやき 千里（せんり）内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のもれやすく、また広がるのが速いことのため。こそ三里。ささやき八丁。〔園圃淮南子・説林訓〕に「附・耳之言、聞於千里也」という句がみられる。

〔園圃會之田〕

ささやき ひとそつと語。耳うち。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。・浄瑠璃・傾城反魂香・「あさのささめきはなんじや。知らぬ。聞いた迄と耳をよせ。・はやり唄・小杉天外」七「快き夏の囁語ササヤキ」を聞く如くである。・草わかは浦原有明がすかに胸に「そは似たりけり」かの唄に、あたなる人の私語（ササヤキ）に。・高瀬舟・森崎樹・あたりがひっそりとして、只軸に割かれる水のささやきを聞くのみである。〔園圃會之田〕余之①

ささやき 橋（はし）夜、だれもないのに人がささやくような音がきこえるという橋。越後など各地にあつて、だれかが密語をかわしたという伝説や橋占、辻占などに関係づけられることが多い。ささやき橋。夫木二「熊野なるおとなし川にわたさはささやきのしほのびのびによみ人しらす」。・俳諧・非礼下・代は塩焔の音なしの川・幽山」からくり・ささやきの橋取はなし素堂。〔園圃會之田〕園圃文明書

ささやき 八丁（はちぢょう）「ささやき 囁千里（せんり）に同じ。・俳諧・毛吹草二「ささやき八丁（はちぢょう）」・浄瑠璃・右大将鎌倉実記十四私語八町（ササヤキ）はつチャウ」・景時間取り・何ちゃ

静は腹が痛い。ささやきぐさ 〔囁草〕一名 ①植物「たけにぐさ（竹似草）」の異名。・書言字考節用集十六「園圃・ササヤキサ」・重訂本草綱目啓蒙一三「毒草・蘆麻・略（附録）博落廻略・ささやきぐさ」 ②植物「あかそ（赤麻）」の異名。・重訂本草綱目啓蒙一三「限草・苧麻・略」一種あかそと呼ぶあり。一名ささやきぐさ。ささやきぐさしやくきくさ皆同名あり。〔園圃〕ササはシシ（藟）の転ヤキはヤクで、毒をもって倒す意か〔大言海〕。

〔園圃〕ササヤキ 〔會之田〕園圃書

ささやき ひとそつと語。耳うち。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。・浄瑠璃・傾城反魂香・「あさのささめきはなんじや。知らぬ。聞いた迄と耳をよせ。・はやり唄・小杉天外」七「快き夏の囁語ササヤキ」を聞く如くである。・草わかは浦原有明がすかに胸に「そは似たりけり」かの唄に、あたなる人の私語（ササヤキ）に。・高瀬舟・森崎樹・あたりがひっそりとして、只軸に割かれる水のささやきを聞くのみである。〔園圃會之田〕余之①

ささやき 千里（せんり）内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のもれやすく、また広がるのが速いことのため。こそ三里。ささやき八丁。〔園圃淮南子・説林訓〕に「附・耳之言、聞於千里也」という句がみられる。

ささやき 橋（はし）夜、だれもないのに人がささやくような音がきこえるという橋。越後など各地にあつて、だれかが密語をかわしたという伝説や橋占、辻占などに関係づけられることが多い。ささやき橋。夫木二「熊野なるおとなし川にわたさはささやきのしほのびのびによみ人しらす」。・俳諧・非礼下・代は塩焔の音なしの川・幽山」からくり・ささやきの橋取はなし素堂。〔園圃會之田〕園圃文明書

ささやき 八丁（はちぢょう）「ささやき 囁千里（せんり）に同じ。・俳諧・毛吹草二「ささやき八丁（はちぢょう）」・浄瑠璃・右大将鎌倉実記十四私語八町（ササヤキ）はつチャウ」・景時間取り・何ちゃ

静は腹が痛い。ささやきぐさ 〔囁草〕一名 ①植物「たけにぐさ（竹似草）」の異名。・書言字考節用集十六「園圃・ササヤキサ」・重訂本草綱目啓蒙一三「毒草・蘆麻・略（附録）博落廻略・ささやきぐさ」 ②植物「あかそ（赤麻）」の異名。・重訂本草綱目啓蒙一三「限草・苧麻・略」一種あかそと呼ぶあり。一名ささやきぐさ。ささやきぐさしやくきくさ皆同名あり。〔園圃〕ササはシシ（藟）の転ヤキはヤクで、毒をもって倒す意か〔大言海〕。

〔園圃〕ササヤキ 〔會之田〕園圃書

ささやき ひとそつと語。耳うち。ささめき。比喩的に、草木、川などのたてる小さな音もいう。・浄瑠璃・傾城反魂香・「あさのささめきはなんじや。知らぬ。聞いた迄と耳をよせ。・はやり唄・小杉天外」七「快き夏の囁語ササヤキ」を聞く如くである。・草わかは浦原有明がすかに胸に「そは似たりけり」かの唄に、あたなる人の私語（ササヤキ）に。・高瀬舟・森崎樹・あたりがひっそりとして、只軸に割かれる水のささやきを聞くのみである。〔園圃會之田〕余之①

ささやき 千里（せんり）内証話がすぐに遠くへ伝わること。秘密のもれやすく、また広がるのが速いことのため。こそ三里。ささやき八丁。〔園圃淮南子・説林訓〕に「附・耳之言、聞於千里也」という句がみられる。

た、竹藪。・無窮（国木田独歩）「裏門を出て笹藪（ササヤブ）の間を通ずる小道を行けば間もなく隣屋敷なり」・田舎教師山田花彦二「笹藪（ササヤブ）の傍に、茅葺の家が一軒」〔園圃會之田〕余之①

ささやま 〔笹山〕一名 笹の生い茂った山。笹におおわれた山。・童謡・「へいたいこ」こ酒井良夫「ささやまけて。童謡」二「三」〔園圃〕笹の茂った所。長野県上伊那郡赤穂0% ②竹の茂った所。竹やぶ。伊豆八丈島三根30% 〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕兵庫県東部に地名。京街道の要地。江戸時代は松平・青山氏五万石の城下町。〔園圃會之田〕

ささやま 〔笹山〕姓氏の一つ。〔園圃會之田〕

〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕

ささやみ 〔笹百合〕一名 ①ユリ科の多年草。本州中部以西の山地に生える。高さ〇・五—一丈、地下に径三—五センチの球状の白い鱗茎があり、茎には紫色の斑点を散布。葉は短葉をも披針形で長さ約一〇センチ。初夏、茎頂に径約一—二センチの満ち満ちた淡紅色の白色の花が一—六個横列に咲く。漢名に百合を当ててが正しくない。やまゆり。ささやみ。〔季夏〕・俳諧・本朝文選三・三語・「百花譜」許百合（ゆり）花は数品おほし。笹ゆり。博多はかたゆり。〔会之田〕・重訂本草綱目啓蒙二・三葉百合ささやみ。やまゆり。ささやみ。〔園圃會之田〕



第①（後通念仏縁起絵巻）